

聖徒の道

12
1993



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1993年12月号



表紙——家族や友人とともに、救い主の誕生にまつわる出来事を演じるとき、私たちの心は鼓舞され、クリスマスの真の精神に向けられる。絵/ポール・マン。

こどものページ——クリスマスが来るとツリーをかざりますね。世界中の子供たちは、「このしゅうかんは自分たちの国にずっと昔からあった」と言っています。でも本当は、ヨーロッパで始まったことなのです。こどものページの16ページには、クリスマスのかざりつけのアイデアがしょうかいされています。写真さつえい/メラニー・シャムウェー。

一般

大管長会メッセージ——クリスマスの精神

第二副管長トーマス・S・モンソン	2
さまようらくだ ジャネット・アイストーン・バック	8
羊飼いを知る ロバート・E・ウエルズ長老	10
聖しこの夜 ディエーン・ウォーカー	22
ジョセフ・フィールドディング・スミス——やさしい神の僕	
レオン・R・ハートショーン	26
ベツレヘムへの道 D・ケリー・オグデン	34

青少年

一番の贈り物 ジミー・カイリー	16
最初のクリスマスパーティー	
ネトサワルコヨトル・サリーナス・ヴェヤサエス	18
クリスマスにできる贈り物	20
主は生けりと知る サリー・J・オダカーク	32
フィクション えらくすばらしいクリスマスメッセージ	
アルマ・J・イエイツ	42

定期特別記事

読者からの便り	1
家庭訪問メッセージ——誓約を交わした女性	25

こども

モルモン経物語——アンモンのたみ	2
クリスマスメッセージ 大管長会から世界中の子どもたちへ	4
分かち合いの時間——お父さま、かんしゃします	
ジュディ・エドワーズ	6
歌 羊飼いたちのキャロル ダニエル・ライマン・カーター	8
教会のそう立者 予言者ジョセフ・スミス シェリー・ジョンソン	9
クリスマスのおくり物 ルイズ・エングストロム作	12
クリスマスの工作	16

聖徒の道

1993年12月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊—イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊—インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊—チェコ語、ハンガリー語、アイスランド語、ロシア語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシントン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、ジョン・H・グローバーク、V・ダラス・メリル、ロバート・E・ウエルズ

編集長：レックス・D・ピネガー
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ティエーン・ウォーカー

工程管理：トム・フォースセット、メアリーアン・マーティンデール

チーフアートディレクター：M・M・カワサキ
アートディレクター：スコット・パン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック

制作：レジナルド・J・クリステンセン、ジェニファー・ダットワイラー、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

配送部長：ジョイス・ハンセン
聖徒の道 1993年12月号第37巻第12号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106 東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351

印刷所 株式会社 精興社/クロスロード
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
普通号150円、大会号350円

Copyright © 1993 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Printed in Japan. 英語版承認—1991年10月 翻訳承認—1991年10月 原題—International Magazines December 1993, Japanese 93992300.

●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留が郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資料管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seto No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year. \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seto No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

読者からの便り

霊的な導き

昔、リアホナがリーハイとその家族を導く羅針盤であったように、私たち家族にとっても「リアホナ」(スペイン語版)は霊的な導きとなっています。

数年前、宣教師から福音を学んでいた時、教会が真実かどうか、また、バプテスマを受けるべきかどうか主に尋ねるよう勧められました。半信半疑でしたが、とにかく祈ってみました。すると、受け取ったばかりの「リアホナ」を手に取るように促されるのを感じたのです。そこには1985年10月の総大会の説教が掲載されていました。何げなくページをめくると、「唯一真の教会」というタイトルが目にとまりました。このボイド・K・バックナー長老の説教のおかげで、生涯最良の選択をすることができました。教会員となって数年たった今、私は専任宣教師として奉仕できる日を心待ちにしています。

教会が真実であることを知るうえで、「リアホナ」は大きな助けになりました。今でも私を導いてくれています。「リアホナ」が、ほかの多くの人々にとっても真理への導き手となるよう願っています。

エクアドル、ポルトビエホステキ部
ラスアカシアス支部
カチウースカ・カレンヨ

真理を知る

真理を知っていることに心から感謝しています。私たちの興味をそそのこの機関誌「タンプリ」(フィリピンの英語版)にも感謝しています。

教会員であることがあまりにすばらしいことなので、私はこの本を用いて福音の知識を分かち合うようにしています。「タンプリ」を用いるのは、人々に教会について知ってもらい、福音の原則を生活に取り入れてもらう良い方法だと思うのです。たとえば、仲の良い学校の友達のひとは「タンプリ」を読みたがるようになり、今では隅から隅まで愛読してくれています。

この機関誌が、真理を知るうえで助けとなっていることに感謝します。私は、自分が確かに神様の子供であり、とても祝福されている女性であると感じています。

フィリピン、ナガステキ部
ミラーワード部
サリー・H・バレンシアーノ

キリストの模範に従う

毎月、「リアホナ」(スペイン語版)の記事を読むたびに心が満たされ、幸せな気持ちになります。イエス・キリストが予言者や指導者を通して明らかにされるメッセージを、「リアホナ」を通して、読むことができるからです。

「リアホナ」の中には、美しいイラストやイエス・キリストの教えに従って生活している人々の写真がいくつも掲載されています。みんなあらゆる言語、あらゆる国籍の人々です。私は、この本が与えてくれる導きに強い証を持っています。

スペイン、セビーリャ伝道部
マラガ地方部マラガ第1支部
ホセ・カソルラ・グラナドス

初等協会の創立についての記事

「リアホナ」(スペイン語版)が大きな助けになっていることを神に感謝しています。「リアホナ」が手元に届くと、私は初等協会の記事を真っ先に探します。というのも、初等協会の歴史にとっても関心があるからです。いつも教会員歴の長い人に、初等協会の創立当時のことやどこで始まったかなどを尋ねているほどです。

扶助協会が100年以上の歴史を持っていることは知っているのですが、初等協会の創立に関する記事も掲載していただけないでしょうか。

ペルー、パレルモステキ部
ノーラ・ベティー・アマーヤ・シルバ



クリスマスの精神

第二副管長

トーマス・S・モンソン

ソルトレークシティのテンプルスクウェアはいつも私たちに美しい姿を見せてくれています。今宵のすばらしさは格別です。降り積もったばかりの白い雪、そして、冷たい冬の夜気、きらめくクリスマスツリーのイルミネーション、キャロルの歌声、身を寄せ合いながら楽しそうに行き交う幾組もの家族連れの様子は、クリスマスが近づいていることを実感させてくれます。

クリスマスの訪れを告げるしるしは
ちまたにあふれ
肌に伝わるは
人々の大いなる喜び¹

すでに100年以上の歳月を経たこの歴史的なタバナクルの、クリスマスを彩るさまざまな色、昔ながらの飾り付けは、私たちに思い出の宝箱のひとつの場面へと静かにいざなってくれます。それはレベッカ・リター夫人がグレートソルトレーク溪谷で1847年12月25日の日記に記した開拓者の様子です。「冬の寒さは厳しい。クリスマスが来たとはいえ、子供たちはおなかをすかしていた。私は草原の向こうから運んできた小麦を、積み上げたまきの下にしまっておいた。その中のひとつかみで子供のために何かを作ってあげたいと思ったが、春の種まきのことを考え、手をつけずそのままにした。」

ソルトレークシティのテンプルスクウェアでは、野宿中の羊飼いたちに主のみ使いが現われたあの夜の情景が等身大の人形で再現される。(左)北訪問者センターの窓越しに照明にきらめくキリストの像が見える。

ソルトレーク溪谷の最初のクリスマスには、信仰と犠牲、愛と涙の物語がいくつもありません。そして、その精神は幾多の年を経る中でも受け継がれ、私たちの家庭や心の中にも注ぎ込まれています。確かに、これらの精神こそ私たちがクリスマスの精神と呼ぶ思いを形作っているものです。

「私はクリスマスの精神。」

私は貧しい家に入って、青白い顔の子供たちに、驚きと喜びの目を見張らせる。

私は守銭奴のしっかり握った指を開かせ、その魂に一点の光明を投じる。

私は年寄りに若い時代を思い出させ、楽しかった昔に返ってほほえみを浮かべさせ、

子供時代の冒険を思い起こさせ、数々の魔法の夢を鮮やかに描かせる。

私は人々に、贈り物でいっぱいのかごを手に、暗い階段を勇んで上らせる。受ける者は世の善に驚きの声を上げるであろう。

私は放蕩者の荒れすさんだ生活を休止させ、彼を気遣い愛する人々に小さなしるしを贈り、その顔に刻まれた悲しみの厳しいしわを喜びの涙で洗い流す。

私は暗い独房に入り、やつれ果てた男たちに過去を思い起こさせ、将来のより良い道を指し示す。

私は静かな白い苦しみの家に入る。弱り切って話すこともできずに、ただ黙って震える唇は、感謝を雄弁に語り出す。

私は幾千もの方法をもって、このうみ疲れた世に神のみ顔を仰がせ、惨めでささいなすべてのことをしばらくの間忘れさせる。

私はクリスマスの精神。²

ヒュー・B・ブラウン副管長は、クリスマスの精神は心の窓を照らし、それによって私たちは忙しい毎日を振り返り、物よりも人に思いを向けられるようになると話しています。クリスマスの精神の本当の意味を理解するには、何よりキリストの精神を理解する必要があります。

それは、昔の予言者たちが予言した最初のクリスマスの日を特色づけた精神でもあります。イザヤの言葉が思い出されます。「見よ、おとめがみごもって男の子を産む。その名はインマヌエルとなえられる。」(イザヤ7:14)イザヤはまた次のように宣言しています。「ひと

りのみどりごがわれわれのために生れた、……その名は、……『平和の君』となえられる。」(イザヤ9:6)

アメリカ大陸の予言者はこう述べています。「全能の主が権能をもって……土から成る身体に宿り……たもう時が遠からず来る。そしてこのお方は誘惑を受け……苦痛……を経験したもう……このお方は神の御子……イエス・キリストと呼ばれ〔る。〕」(モーサヤ3:5-8)

そして、野宿中の羊飼いたちに主のみ使いが現われたあの夜が訪れたのです。み使いは羊飼いたちにこう言いました。「恐れるな。見よ……大きな喜びを、あなたがたのために教主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。」(ルカ2:10-11)羊飼いたちは急いで行って、かいばおけに寝かしてある幼な子、主なるキリストを捜し当て、賛美しました。また、東方からエルサレムに旅してきた博士たちがいました。彼らは言いました。「『ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました。』……彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた。そして、家には行って、母マリヤのそばに幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・没薬などの贈り物をささげた。」(マタイ2:2, 10-11)

ベツレヘムのこの幼な子の誕生とともに、大いなる賜が下されました。その賜は武器よりも強く、カイザルを刻んだ金貨よりも長く朽ちることのない富でした。この幼な子は王の王、主の主、約束のメシヤ、イエス・キリスト、神の御子となえられるお方でした。

この時以来、クリスマスの時期を祝うクリスチャンたちの心に、贈り物をする精神が生じるようになりました。「神はこの大切な季節に、ご自身あるいは人々への贈り物として何を捧げるよう私に望んでいらっしゃるのか」と自問することは、現代に生きる私たちにどんな良い結果をもたらしてくれるのでしょうか。エマソン(1803-1882年。アメリカの随筆家、詩人)は次のような言葉を残しています。「指輪や宝石は贈り物ではなく、贈り物の代用品にすぎない。唯一まことの贈り物は、あなた自身の一部を捧げることである。³

デビッド・O・マッケイ大管長はこう述べています。「まことの幸福は、人を幸福にすることによってしか得られない。それこそ、自分の命を失う者はそれを見いだす、という救い主の教えの実践である。要するに、クリ



ベツレヘムのこの幼な子の誕生とともに、大いなる賜^{たまもの}が下されました。その賜は武器よりも強く、カイザルを刻んだ金貨よりも長く朽ちることのない富でした。この幼な子は王の王、イエス・キリスト、神の御子となえられるお方でした。

スマスの精神とは、キリストの精神にほかならない。それは私たちの心を兄弟愛と友愛で満たし、心のこもった奉仕の業をなすよう促してくれる。それはイエス・キリストの福音の精神であり、『地に平和』をもたらすものへの従順である。なぜなら、それは『すべての人による思いを』という意味だからである。⁴

「お前たちが同胞^{はらから}のために務めるのは、ただお前たちの神のために務めるのである」(モーサヤ2:17)という教えを心に留めましょう。そうすれば、チャールズ・ディケンズの名作「クリスマス・カロール」の中でエブニゼル・スクルージに語りかけたジェイコブ・マーレイの亡霊のような困った状況に陥ることはないでしょう。スク

ルージはマーレイの体を縛っている大きな鎖を見て、「鎖につながれておいでなのは、どういうわけか、お話しください」と尋ねました。

マーレイが答えました。「これは生きていた時に自分で作った鎖なんだ。それに今つながれているんだ。……鎖の環の一つずつ、一つずつ、一ヤールまた一ヤールを、我とわが手で作ったのだ。」

スクルージは自分自身をも慰めるつもりで言いました。「だが、ジェイコブ、お前さんは商売上手だったじゃないか。」

またマーレイが答えました。「商売だって！ ……人類の問題が私の商売だったのだ。……いやしくも、それぞれの置かれた小さな範囲^{はんい}内で、いかなることのためであろうと、熱心に力をつくしているキリスト教的精神の持主であるならば、さまざまな有益なことをするためには人間の生命は余りにも短かすぎると思うはずだということを知らないのか。また、一人の人間が失った機会はいかほど後悔^{こうかい}しても取り返しはつかぬということを知らずにいるのだ。だが、私もそうだったのだ。おお！ 私もそうだったのだ！」

そしてマーレイはこう付け加えました。「なぜ私は気の毒な人たちをかまわずに通り過ぎたのだろうか？ 東の国の博士たちをみすぼらしいあばらやへ導いて行ったあのありがたい星をなぜ見上げなかったのだろうか？ その星に導かれて訪ねてやるべき貧しい家もあったらうに！」⁵

幸いなことに、人のために働く特権はすべての人に与えられています。私たちも見上げさえすれば、さまざまな機会に導いてくれる光り輝く特別な星を見いだせるのです。

ディック・ヘッドリー兄弟と奥さんのマリー姉妹のクリスマスカードに記されたすばらしいメッセージを紹介

したいと思います。それには「現代の奇跡」という題がつけられています。

ふたりは次のように書いています。「私たちの家族は友人と一緒に、LDS 人道援助救済機関の援助の下に、プロジェクト・コンサーン・インターナショナルと協力して、何か月間か食糧、衣料、医薬品、毛布、おもちゃなどを集めました。やがてこの計画の最終期限が来て、コンテナがソルトレークシティから送り出されることになりました。ルーマニアの孤児院に送る大きなコンテナに荷積みをするその最後の時は実に大変でした。最終的には約18トンの救援物資が積み込まれました。最後のぎりぎりの時になって、プロボから着いたバーバラ・ブintonという友人がいます。彼女もいくつかの物を持ってきましたが、その中に1台の歩行器がありました。バーバラが孤児院援助プロジェクトに関心を持っていることを聞いた隣人が、自分の子供の使っていた歩行器がルーマニアで必要になると強く感じて提供してくれたものでした。私たちの娘キャシーはバーバラが持参したものに感謝しましたが、その歩行器を見た時は、どうしたものかと考えま

した。歩行器は対象品目のリストに入っていなかったからです。しかしキャシーはこう考えました。『まあ、いいわ。大した重さじゃないし。積んじやいましょう。』

私たちの家族はルーマニアに着いて、ひとりの医師に会いました。その医師はレイモンドという名の4歳の孤児の治療に当たっていました。レイモンドはいくつもの肉体的障害を持っていました。足の湾曲した、盲目の子供でしたが、足の方は整形外科手術を受けたばかりでした。リン・オボーンという医師が、それまで歩行経験のまったくないレイモンドになんとか足の使い方を教えようとしていました。彼が私たちに最初に言った言葉はこうでした。『あなたがたがああコンテナを運んでくれた



「現代に奇跡なんてあるわけがない」という人がいるかもしれません。しかし自分の祈りがかなえられたルーマニアのその医師はこう答えることでしょう。「奇跡は確かにあります。」

かたがたですか。レイモンドが使える子供用の歩行器があるとうれしいのですが。』キャシーは『たしかそれらしい物があったような気がするけど、どれくらいの大きさだったかしら』と答えると、弟のブルースに、『急いでコンテナの中を調べてきて』と言いました。ブルースは山と積まれた衣類や食糧をかき分けて歩行器を捜しました。ようやく歩行器を見つけたブルースは大声で言いました。『こんなに小さい物だよ』と。皆が歓声を上げました。そしてその喜びは、たちまち涙に変わりました。彼らは皆、自分たちが現代の奇跡のただ中にいたことを理解したからです。

『現代に奇跡なんてあるわけがない』と言う人がいる

かもしれません。しかし自分の祈りがかなえられたその医師はこう答えることでしょう。「奇跡は確かにあります。現にレイモンドは歩いています。」歩行器を提供するように強く感じたあの隣人は、まさしく喜んで奉仕する主の器でした。きっとその方も、これが現代の奇跡だということに同意するでしょう。

このようなもろもろの体験によって心を豊かにされた私たち家族は、神が祈りに耳を傾け、聞き届けてくださることを証^{あかし}できます。そしてそのことに感謝しています。」

ヘッドリー家の人々は、ディックが心臓発作を起こした後で医師たちから悲観的な告知を受けた時のことを思い起こしていたのではないのでしょうか。医師の所見は、「あなたの心臓の治療は不可能です。あとは、新しい心臓を移植するしかありません」というものでした。しかし不動の信仰と熱心な祈りによって、奇跡が起こったのです。心臓はよくなり、病から快復し、神の恵みへの感謝の思いが彼らの心にあふれました。

ディケンズの次の言葉は、ディック・ヘッドリーとその家族のために書かれたようなものです。「私は心からクリスマスを尊び、一年中その気持ちで過ごすようにいたすつもりです。私は過去、現在、未来の教えの中に生きます。この三人の幽霊さま方は私の心の中で私をはげましてくださいます。お三方からお教えいただきましたことに閉め出しなど喰わせません。」⁶

主の次の嘆きの言葉は、クリスマスの時期に語られたものであり、非常に奥深い教訓です。「きつねには穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子にはまくらす所がない。」(マタイ8:20)

「客間には……余地がなかった」(ルカ2:7)という状況は主の生涯を通して変わらず、その心を悲しませました。使徒パウロが語った無上の賜を思い起こしてください。「神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである。」(ローマ6:23)主の約束の効力は永遠に変わりません。「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはい〔る〕であらう。」(黙示3:20)

まことのクリスマスの精神は、主の約束の言葉の中に言い表わされています。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。」(ヨハネ11:25-26)

私が主に捧げられるものは何だろう、
この貧しい私が。
私が羊飼いだったら
子羊を捧げよう。
博士だったら、
自分の務めを果たそう。
しかし、この私が主に捧げられるものは何だろう。
捧げよう、自分の心を。⁷

私たちがキリストに自分の心を捧げるなら、クリスマスの精神が私たちの贈り物となることでしょう。私は、皆さんがこの貴い賜を熱心に求め、喜んで分かち合われるように願っています。□

モンソン副管長のこの説教は、1992年12月6日の大管長会クリスマス集会で話されたものです。

話し合いのポイント

1. 信仰と犠牲、愛と涙は私たちがクリスマスの精神と呼ぶ思いを形作っているものです。
2. 「神はこの大切な季節に、ご自身あるいは人々への贈り物として何を捧げるよう私に望んでいらっしゃるだろうか」と自問することは、現代に生きる私たちによい結果をもたらしてくれるでしょう。
3. 人のために働く特権はすべての人に与えられています。私たちも見上げさえすれば、さまざまな機会に導いてくれる光り輝く特別な星を見いだせるのです。

注

1. 作者不詳
2. 作者不詳
3. 「ラルフ・ウォルド・エマソン全集」p. 286
4. 「福音の理想——デビッド・O・マッケイ説教選集」(「インブルメント・エラ」1953年)p. 551
5. チャールズ・ディケンズ「クリスマス・カール」村岡花子訳、新潮文庫、pp. 31-35
6. 同上、p. 136
7. クリステイーナ・ロセッティ「暗い冬」名詩選、アル・ブライアント編、p. 161

さまようらくだ

ジャネット・アイストーン・バック

我が家では、クリスマスになると、キリスト降誕の場面を陶器の人形で再現することを毎年楽しみにしています。この場面は、博士やらくだ、羊飼いと羊、そしてもちろんマリヤとヨセフと生まれたばかりのキリストで構成されます。毎年、同じように人形を配置するのです。

子供たちがまだ幼かったある年のことですが、私は人形を一つ一つ注意深く包みから出し、この世で最初のクリスマス表現のために並べました。子供たちは集まって来て、見入っていました。私たちはキリストの誕生、羊飼いや博士の訪れについて話をしました。それから、いつものように、人形はもろく壊れやすいことを説明し、触らないように注意しました。

しかしこの年、2歳になった娘エリザベスの好奇心はいつもにも増して旺盛おうせいでした。人形を配置したその日、何度も、らくだが所定の位置を離れてさまよい、羊も羊飼いたちのそばから迷い出ているのに気づきました。私は少しいらいらしながら、それらを元の場所に戻すたびに犯人のエリザベスを探し出しては、もう触らないように注意しました。

翌朝、エリザベスは私よりも先に目を覚ますと、そそ

くさと階段を降りて行きました。私が居間に入った時には、またもや人形の配置がすっかり変わっていました。今度は、すべての人形がひしめき合うように1カ所にかたまっています。

やれやれ、と思いながら元に戻そうと歩み寄った時です。ふと別の思いがよぎり、立ち止まりました。その配置は、23もの人形が円く寄り集まって、あたかも真ん中の生まれたばかりのイエスをもっとよく見ようとひしめき合っているかのようでした。

2歳の子供の物の見方に深く考えさせられると同時に、みたまを強く感じました。確かに、キリストこそこのクリスマスという季節の中心となるべきお方なのです。クリスマスのシーズンだけでなく、いつも救い主を生活の中心とすることができたら、どんなにか永遠の見地に立って生きられることでしょう。そして、私たち一人一人に注がれる主の愛を、主に心を閉ざしている人々にもっと容易に分かち合えるでしょう。

私は、その年、キリスト降誕を表わす人形をエリザベスが並べたままにしておきました。そしてそれは、クリスマスの間ずっと、その真の意義について思い起こす役目を果たしてくれました。□



羊飼いを知る

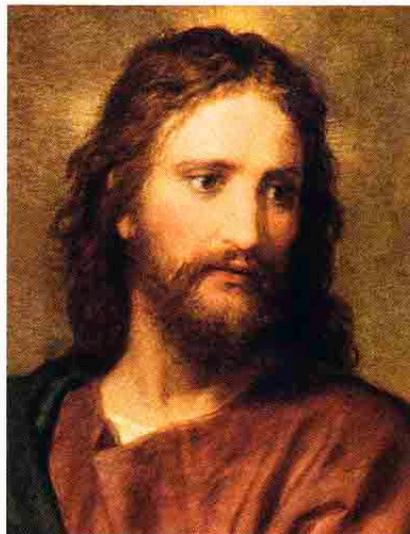
七十人
ロバート・E・ウエルズ長老

以前、ヒュー・B・ブラウン副管長から次のような感動的な話を聞いたことがあります。ある時、ひとりの有名な俳優がニューヨークの大劇場ですばらしい劇を上演しました。幕が下りると、彼は大きな拍手喝采を浴びて、観客に何度も何度も舞台へ呼び戻されました。そうしているうちに「詩篇の第23篇の朗読をお願いします」と客席から声がかかりました。

「詩篇の第23篇ですって。わかりました。それなら覚えていますから。」

俳優としての彼の朗読は、演技という観点からすれば非の打ち所のない、完璧なものでした。それが終わると再びあらしのような喝采が起きました。それから、俳優は舞台の前に来るとこう言いました。「皆さん、この観客席の最前列に、知り合いのご老人がいらっしゃいます。突然で申し訳ないのですが、もしお願いできれば、この方に詩篇の第23篇をここに来て朗読していただければと思います。いかがでしょうか。」

その老紳士が驚いたのは言うまでもありません。震え



ながら舞台上がると、おずおずと大観衆の方に目を向けました。そして、家で祈るときのような面持ちで、目を閉じ、頭を下げ、神に向かって話しかけたのです。

「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。……」

老人が朗読を終えても、拍手もなければ喝采もありませんでした。しかし劇場に涙で目を潤ませていない人はひとりもなかったのです。先の俳優が舞台に出て来て言いました。「皆さん、私は詩篇第23篇の言葉を知っています。

でも、この方は羊飼いご自身をご存じなのです。」(ヒュー・B・ブラウン「絶えざる探求」pp. 335—336より翻案)

エズラ・タフト・ベンソン大管長は、どうしたら羊飼いを知る者となることができるか、その鍵についてこう述べています。「キリストを知るためには、聖典、またキリストを知る人々の証から学ばなければならない。私たちは祈り、そして神が戒めを守る人々に約束された靈





聖典を研究するなら、イエスが教えを説き、愛を示し、病を癒しながら人々の中を歩まれた姿に、時の流れを越えて目を向けることができる。こうして私たちは主について学び、主を私たちの羊飼いと知ることになるのである。

感、啓示によって主を知ることができる。」（「神、家族、国家——我らの3つの不動の忠誠」p.156）

愛に満ちた心

あるひとりのアルゼンチン出身の銀髪の姉妹も羊飼いを知っている人です。彼女はその長い生涯を主と主の教会、そして隣人のために捧げてきました。

彼女はエルタ・メラ姉妹といいますが、彼女が初めて末日聖徒の教会に集ったのは宣教師に連れられてのことでした。宣教師は自分たちがそれまで出会った人々の中で、彼女ほど教養が豊かで、洗練され、高度な教育を受けた求道者はいないと感じていました。彼らはメラ姉妹のきれいな家で、数回福音を教えました。そしてある時、日曜日の教会の集会に一緒に出席しませんかと誘うと、彼女は快くそれを承知しました。集会は古ぼけた建物の中で開かれていました。そこに集う会員たちはこの新しい求道者に比べて、どちらかというと言葉が貧しい暮らし向きの人々でした。

集会の進行は、自分たちの賓客に良い印象を与えたいと願っていたふたりの宣教師の目から見れば、あまり満足できるものではありませんでした。支部の指導者たちは召されてから日が浅く、責任がまだよく飲み込めていない状態です。司会者がまごついてしまったり、最も神聖であるべき聖餐の儀式が中断されたりという有り様でした。話も熱心な宣教師たちが望む、人の心を引きつけるものとは言えませんでした。子供たちが動き回ったり、泣き声を上げたりすることが何度もあって、敬虔な思いに浸るなどというものではありません。荘重な宗教音楽を奏でるオルガンもありません。優雅な装いの求道者が持ったに違いない否定的な感情を思うと、ふたりの宣教師の心は重く沈みました。ふたりは彼女がいつもは、どれをとっても高度に洗練された、上流階級の人々が集

う美しい大聖堂で礼拝していることを知っていたのです。

その日の帰り道、片方の宣教師が恥じ入った様子を見せながら弁解を始めました。「私たちは今あのような建物を使っていますが、どうか事情をお察しください。いつかは、新しくて立派な礼拝堂が建つと思います。」こうも言いました。「それと、召されたばかりの指導者たちへもご理解いただきたいのです。教会の神権者は教会の責任を職業としているのではありません。それで交代で集会の司会をするのですが、彼らは指導者に召されたばかりで、まだそのやり方を勉強中なのです。」さらに言葉を継ぐと、メラ姉妹はその宣教師の方を向き、幾分か口調でこう言いました。「長老、謝る必要は何もありません。キリストの時代もきっと同じだったと思いますよ。」

聖典を学んで身につけた霊的な理解力と救い主への知識とをもって、彼女は幾世紀にも及ぶ歴史の流れを越えたところを見据えていたのです。彼女の心の目は大聖堂やオルガンなどにとらわれてはいませんでした。その向こうにあるものを見ていたのです。彼女の思いは時の流れを越え、羊飼いである救い主が貧しい漁師の使徒や罪人、そしてときにはハンセン病のためにのけ者にされていた人たちとともに集われる姿に向けられていました。彼女が心に思い描いたのは、小さな2階の1間を借りて集う古代の聖徒たちであり、救い主が傍らの幼な子たちにやさしくほほえみかけられる姿だったのです。彼女が心の底から、そして深い洞察力をもって、「キリストの時代もきっと同じだったと思います」と言えたのは、羊飼いを知っていればこそです。

この婦人の模範は私に、多くの人々が従ってきた次の勧告を身をもって示してくれるものです。「あなたの心をキリストへの思いで満たし、キリストへの愛であふれさせなさい。そして人生をキリストへの奉仕に捧げなさい。」



DETAIL FROM THE FIRST WISDOM STAINED GLASS WINDOW CREATED BY LUCY THURSTON KINNEY FOR THE SECOND WARD, SALT LAKE LIBERTY, UTAH.

ジョセフ・スミスは、最初の示現(上)をはじめ、カートランド神殿において救い主とまみえる(右)など、
数々の驚くべき示現を経験した。
私たちは彼を、親しく主を知っていた予言者としてたたえている。

羊飼いを知っていた予言者

もうひとり、だれにも勝ってよく羊飼いを知っていると思われる人がいます。その人は何世紀もの空白の時を経て地上に再び立てられた最初の予言者です。彼は示現の中で初めて救い主とまみえた時のことをこう書いています。「私は自分の真上に太陽にも増して輝く一つの光の柱を見た。……そしてその光が私の上に留った時、私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまひ、他のお一人を指して『こはわが愛子なり、彼に聞け』と仰せられた。』(ジョセフ・スミス2：16-17、下線付加)

この予言者はその後も、主にしてよみがえられた贖い主から、数々の驚くべき示現を受けました。そのような示現のひとつを彼は、こう記しています。

「われらの心より覆い取去られて覚りの眼開かれたり。

われらは、われらに面して教壇の胸欄に立ちたもう主を見たり。而して、主の脚下にはこはくの如き色した

る純金の床ありき。

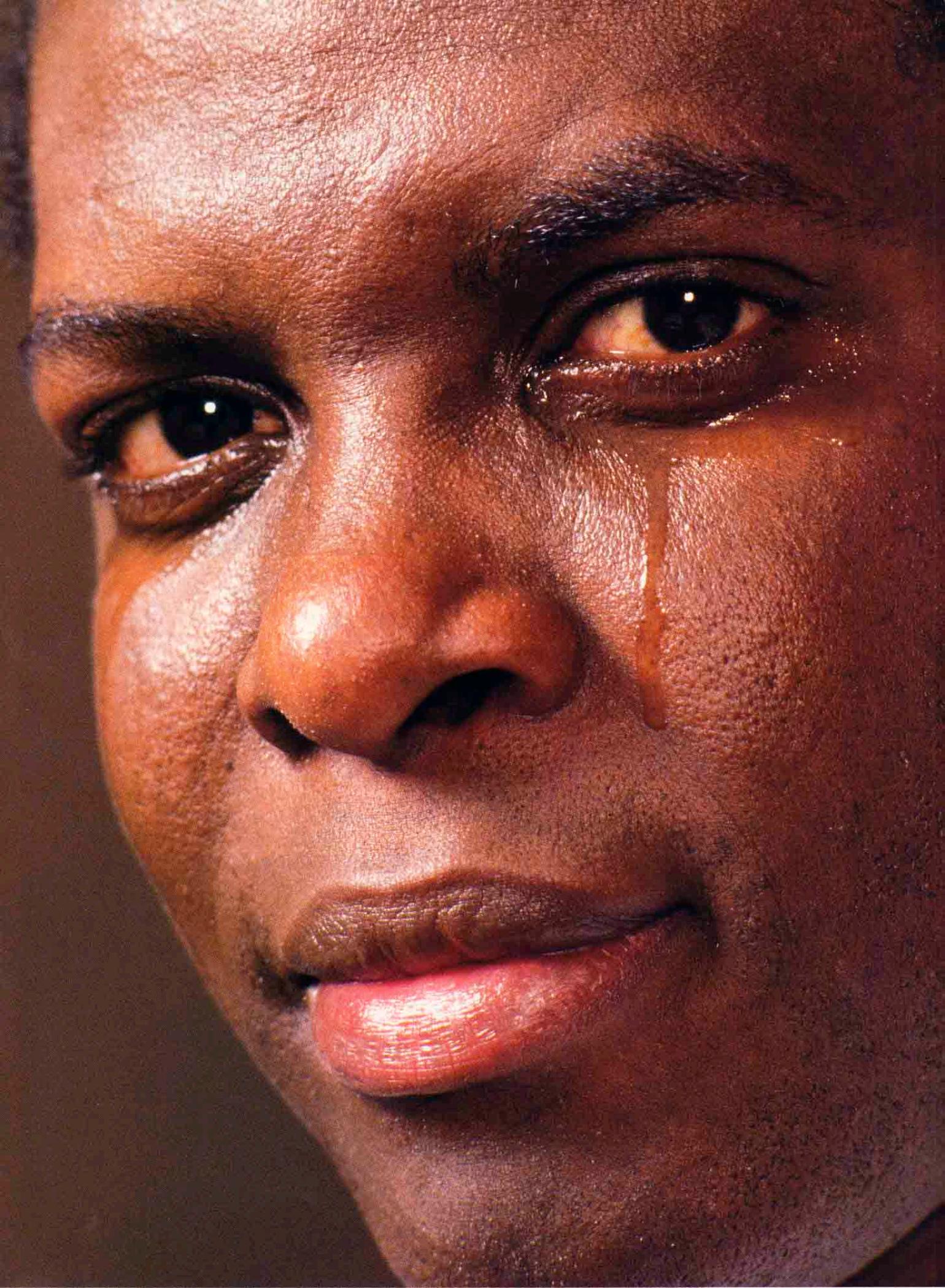
その眼は燃ゆる炎の如く、頭髮白きこと清き雪の如く、その顔は日の輝きにも勝りて光り輝き、その声は洪水の激する音の如し。〔主は〕言いたもう。

われは始めなり終りなり。われは生ける者なり殺されたる者なり。父と汝らの間の仲保者なり。」(教義と聖約110：1-4)これを書き記した予言者は羊飼いを知っていました。

予言者ジョセフ・スミスはみずからの証に一命を賭し、殉教しました。自分の血をもって証を結び固めたのです。私たちはジョセフ・スミス、親しく主を知っていた予言者としてたたえたいと思います。

私たちはそれぞれ、こう自問してみる必要があります。「はたして私の愛は、また勉強は、奉仕は、羊飼いを知らずにじゅうぶんなものだろうか。」私たちが皆、神の戒めに従うことによって救い主を知るに至り、主とまみえる時に、「私はあなたを存じ上げています。あなたこそ私の羊飼いです」と言えますように。□





一番の贈り物

ジミー・カイリー

クリスマスの贈り物をもらったことなど1度もありませんでした。しかしあの時、父は最も大切な、かけがえのない贈り物をくれたのです。

バ。プアニューギニアのポートモレスビーで、我が家の3番目の子供として、私は生まれました。我が家は貧しかったので、子供のころ、クリスマスや誕生日といっても、周りの子供たちのような楽しい思い出は残りませんでした。それどころか、ほかの子供たちが贈り物やごちそうに囲まれていると思うと、いちばん悲しい時となりました。

父のわずかな給料も週末の酒代に消えるため、私たちはいつも貧乏で、おなかをすかせていました。母が窮状を訴えると、父はひどく怒って、母が傷つきむせび泣くまで暴力を振るったものです。母は私たち子供を守ろうとして、どれほど苦労したことでしょう。

クリスマスが来ては去っていきました。私たちのクリスマスは何ひとつ変わらず、プレゼントやごちそうを買うお金はありませんでした。妹と私は、クリスマスの朝早く、近所の子供たちが自分たちあてのクリスマスプレゼントを見つけて大喜びする声に目を覚ましたものです。

兄妹で町のごみ捨て場まで行き、まだ使える物や遊べる物はないか、探したこともありました。真新しく、すてきな、自分だけのクリスマスプレゼントが欲しくてたまりませんでした。

ある日曜日のこと、妹がそれまでいごと一緒に数回出かけていた、耳慣れない名前の教会から戻って来ました。妹は家族に会わせようと、夫婦の宣教師を連れて来ていました。コール長老と姉妹はとても親切で、謙遜な人たちでした。私たちは彼らから、イエス・キリストの福音とまことの教会について学ぶようになりました。レッスンを聞き、みたまの導きを求めてたびたび祈った結果、私たちはバプテスマを受けることにしました。

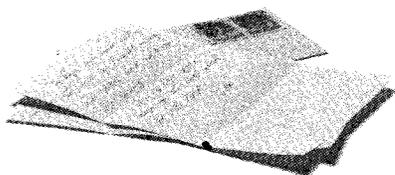
バプテスマを受けてから、我が家の生活は霊的に変わり始めました。しかし、経済的には相変わらず苦しいままでした。ですから、自分だけのプレゼントがもらえる本来のクリスマスへの子供らしいあこがれは、まったく実現しませんでした。

それでも私たちの改宗によって父は変わり、それまでの悪い習慣を断ちました。酒もたばこもやめ、週末に家族にひもじい思いをさせることもなくなりました。私はただうれしくて、父に「父さん愛してるよ」と言いたいと思っていました。でも怖くて言えませんでした。「父さんの方から愛を示してくれたらなあ」とも思っていました。父が私のことをどう思っているのか、それまで1度も父の口から聞いたことがなかったのです。

やがて私は、ミクロネシア・グラム伝道部に召されました。伝道中、父から1通の手紙を受け取りました。そこにはこう書いてありました。「息子よ、おまえが伝道に出てくれて、父さんは本当に幸せ者だ。」そして手紙はこう結ばれていました。「父さんはおまえを愛しているよ。これからもずっと主のすばらしいみ業に励んでおくれ。」

私の目に喜びの涙が込み上げてきました。父からこんな言葉を聞いたのは初めてでした。早速私は父に返事を書いて、言葉の贈り物をしました。「父さん、ぼくも父さんを愛してるよ」と。

今、私は伝道から帰還し、父は支部長として働いています。これまでの人生を振り返ってみると、「自分はとても特別な、ある贈り物を授かってきたのだ」ということがわかります。そしてそれは、子供たちがクリスマスの季節に開けるようなものではなく、日々はぐくんでいける、永遠の価値を持つ贈り物なのです。□



最初のクリスマス

ネトサウルコヨトル・サリーナス・ヴェヤサエス

ILLUSTRATED BY LARRY WINBORG

バカラーはメキシコのキンタナ・ロー州にある小さな古い町です。人口は約7,000人で町の端から端まで歩いて45分しかかかりません。

ほとんどの家屋は木の小屋で、屋根にはヤシの葉やタン板が使われています。この町は、中央アメリカのベリーズとの国境に近く、カリブ海に面した湾につながる美しい池のほとりにあります。

1982年の10月、バカラー支部が設立されました。会員は、父と母、妹と私の4人だけで、当時私は16歳でした。1週間後の家庭の夕べで父は私たちに尋ねました。「この支部を発展させるために、私たちには何ができるだろうね。」

しばらくの間、皆黙って答えを考えていましたが、母が力強く言いました。「もうすぐクリスマスね。町じゅうの子供たちのためにクリスマスパーティーをしたらどうかしら。パーティーなんて行ったことがない子がほとんどだもの。きっといい思い出になるわ。心を開いて福音を受け入れてくれる子供たちもいっぱいいるはずよ。」

だれもがすばらしい考えだと思いました。父は各自に

仕事を割り当てました。母は女の子たちのために縫いぐるみを作ることになりました。妹はピンヤータス(訳注——色とりどりの紙で作った張子人形。中にキャンディーを入れておき、ひもで天井からつるす。子供たちは順番に目隠しをしてそれを棒でたたいて壊し、中のキャンディーを取り合って遊ぶ)を作ってキャンディーを詰めることになりました。父は、パーティーでクリスマス・キャロルを演奏してもらえるよう、州の交響楽団を呼ぶ準備をしました。そして私は男の子たちのために植物のつるで飛行機を作ることになりました。縫いぐるみの人形と飛行機はそれぞれ150個ずつ用意しようということになりました。私たちは喜んでこうした仕事を引き受けました。パーティーを実現させるためにどれだけたくさんの犠牲を払わなければならないか、その時はまだわかっていませんでした。そして、だんだんと思い知らされることになったのです。

その後の家庭の夕べで、父は家族に、今年はいつものようなクリスマスプレゼントやクリスマスの特別なごちそうは用意できないと告げました。その言葉には、あまり納得できませんでした。

ある日学校から帰ると、ベッドのシーツやカーテンの



パーティー

いくつかがなくなっていることに気づきました。何日か後には、私の服も何枚かなくなっています。妹にも同じことが起きていました。私たちはなくなったものを捜しました。そして、母が縫いぐるみの人形を作るために、これらのシャツやカーテン、そして服を使っていることを知りました。それが気に入らず、母と口げんかをするようになったこともありました。

クリスマスが近づいてくるにつれ、飛行機を作るために時間やお金や労力を一層費やさなくてはいけなくなりました。母の背中には、長時間に及ぶ手縫いの人形作りのため痛み始めました。そのうち、私も人形の目に当たるボタンを縫いつける手伝いをしなければなりません。私はこれも気に入りませんでした。

やっとのことでクリスマスパーティーの前日を迎えました。父は私に、子供たちを招待しに町じゅうの家を訪ねるから白いシャツを着てネクタイをするように言いました。

パーティーの当日、子供たちは早くから集まり始めました。親に連れられて来る子もいれば、ひとりで来る子もいました。午後になるともっとたくさんの子供たちが来ました。州の交響楽団が到着してクリスマスの賛美歌

を演奏しました。私はクリスマスの物語を話しました。その後、子供たちはピンヤータスを棒でたたきゲームをしてキャンディーをもらいました。最後に、男の子と女の子に分かれて2つの長い列になってもらって、妹と私は手作りのおもちゃを手渡しました。

小さな子供たちのうれしそうな顔といたら、言葉では言い表せないほどでした。こんなうれしそうな顔をひとつ見ただけで、今までの苦労が報われた気がしました。怒りやねたみのような気持ちが心から消え去り、感謝と喜びの涙に変わりました。子供たちが一人一人プレゼントを受け取るたびに、私にも人生の最も貴いプレゼントが手渡されたのです。それは奉仕をする喜びでした。

クリスマスパーティーの後、宣教師がバカラーに赴任しました。2カ月後、支部の会員数は当初の4人から25人になりました。6カ月後には45人になりました。そして11年後の今、バカラー支部は美しい集会所を持つバカラーワード部になっています。

母の言葉のとおりでした。バカラーでの最初の年に感じた、クリスマスの精神のおかげで、私たちをも含む多くの人の心が開かれ、福音の祝福を受けられるようになったのですから。□





クリスマスにできる 贈り物

今までに、次のような批判の声を聞いたことはありませんか。クリスマスが商業的になりすぎて、救い主の精神そのものよりも物を買うことの方に、より重点が置かれているのではないかという意見です。

実際、多くの人々がそういう傾向にあるかもしれませんが、私たちまでそれに同調する必要はありません。贈り物をする機会は、もっと霊的で有益なものにできるはずです。

贈り物が救い主の愛を表わすものであれば、それを贈った人も受け取った人もともにキリストについて学べます。私たちが個人として、または定員会や

クラスで、あるいは家族でできる贈り物のアイデアをいくつか挙げてみました。もちろん、自分だけのアイデアを捻出するのもよいでしょう。

家庭で

- 家族一人一人のために贈り物としてすることができる良い行ないを考える。たとえば、靴を磨いたり、雑用を代わりにしてあげたり、家族の助けになるようなことを計画するなど。
- 子供の好きな本をテープに吹き込み、何度でもお話が聞けるようにする。
- 子供向けの冒険物語を書いて本にす

る。物語には、プレゼントしようと思う子供を登場させる。

- 家族一人一人に、感謝の気持ちや愛のこもった手紙を書く。
- 家族全員に日記帳、またはノートをプレゼントし、定期的に日記をつけることを家族の目標にする。
- 家族に植物の種と植木鉢を贈って、だれの種が最初に芽を出すかなど皆で観察する。

地域やワード部・支部で

- 知り合いの中に高齢の人、目の不自由な人、病気の人、または体に障害の

ある人がいれば、その人のクリスマスの準備や計画を手伝うことを申し出る。クリスマスの時期が終われば、ツリーを処分したり、ライトや飾りを片付ける手伝いも申し出る。

■住んでいる地域の気候にもよるが、近所の人々の庭仕事や雪かき、家の修理などを手伝う。

■地域で、おもちゃや自転車を修理したり、食料や衣料を集めたり

して、恵まれない子供たちに寄付している奉仕団体がいないか探し、その集荷や配送を手伝う。

■地域で無料のクリスマスコンサートが開催されていないか調べ、小さすぎてもたは高齢のためひとりでは行けないような人に、一緒に行くことを申し出る。

■ひとりで子供を育てている人に、半日、子供たちを預かることを申し出る。そして子供たちが父親や母親のために

プレゼントを選んだり、作ったりするのを手伝う。

■小さい子供のいる夫婦にベビーシッターを申し出て、彼らが一晚、ふたりだけで出かけられるように計らう。

■自分のワード部や支部出身の宣教師や学生などでクリスマスの時期を家から離れて過ごす人のために、クリスマスプレゼントを送る。

■特別なモルモン経を用意して友人にプレゼントする。□





きよ 聖しこの夜

ディーン・ウォーカー

クリスマス前の数週間は、予想どおり慌ただしく過ぎ去っていきました。過去の経験から、準備のためかなりの時間を取られるだろうということはわかっていましたが、今年こそはいつもと違うクリスマスになるようにと願っていました。手順をよく考えてこの時期に臨もうと思いました。毎日の忙しい生活に追われて大切なクリスマスの精神を忘れてしまわないように、買い物もクリスマスの準備も、じゅうぶんなゆとりを持って事前に済ませておこうと思ったのです。

確かに、今年はいつもと違っていました。というのはクリスマスシーズンに入る前から、いつになく多くのチャレンジを受けることになったからです。タバナクル合唱団の団員である私は、毎年この時期になると何時間もタバナクルの建物の中で過ごす覚悟でいなか

ればならないことを、それまでの経験で知っていました。12月ともなると、特別なプログラムや、臨時のリハーサル、またクリスマスコンサートといった活動で、スケジュールはいつもぎっしり詰まっていました。そのうえ、今年はこのような活動に加えて、クリスマスの翌日から合唱団のイスラエル公演旅行を控えており、その準備もしなければならぬのです。数カ月にわたる特別なリハーサルを要するむずかしい曲をマスターしなければなりません。このような忙しい予定だけでなく、勤務先のスケジュールもこなし、合唱団ツアー終了後に予定されている仕事の準備もしなければならぬでした。そのような状況にあって、楽しいクリスマスの準備や家族のためには、ごくわずかの時間しか割けなくなっていました。

夫に先立たれていた私の母は、なんとかしてすべてのことをやり終えようと奮闘している私の姿を静かに見守っていました。母が私にもっと足繁く訪問し、ときには買い物に連れて行ってほしいと願っていること、それが無理なら、もっと頻繁に時間を見つけて電話をかけてほしいと願っていることはわかっていました。我が家では、母が日曜日に一緒に夕食を食べることをいつも楽しみにしていました。自分に関心を示してくれないといった不平を言う母ではありませんでしたが、孤独の中で人との触れ合いを求めていることは確かです。夫を4年前に亡くしてからというもの、母の生活にはぽっかりと大きな穴が開いたようでした。ふたりは文字どおりどこから見ても永遠の伴侶はんりよでした。神殿で奉仕するときも、家の掃除をするときも、子供や孫たち



と楽しく過ごすときも、いつもふたりは一緒でした。そして母が今でも、夫と過ごした日々や楽しいクリスマスのことを思い出しているのを知っていました。たくさんのおクリスマスプログラムや家族の集いで、声を合わせて歌を歌ったあの時代には、愛と音楽が満ち満ちていたのです。そして今母はひとりぼっちでした。

私は妹とともに、クリスマス休暇に向けてクリスマスツリーを立てたり、部屋の飾り付けをする母を手伝いました。私たちは母に代わってクリスマスの買い物をほとんど済ませてしまいました。しかしクリスマスの2週間前ぐらいになったころ、母が電話をかけてきました。「あなたの忙しいスケジュールに割り込んでしまって悪いけど、いつか午後の買い物に連れて行ってはくれないかしら」ということでした。母は私たちが買ったものに加えて、自分なりに何か心のこもった贈り物を選んで買いたかったのです。それまで目まぐるしいスケジュールで生活していた私にとって、この買い物は歓迎すべき楽しい気分転換となりました。ふたりで一緒に昼食を取り、すばらしい午後のひとときをともに過ごすことができました。時間がなくなかなか感じることのできなかつたクリスマスの時期の喜びや特別な気持ちを満喫することができました。

ふたりで午後行動をともにしたその日からほんの数日後、母はインフルエンザにかかってしまいました。私たちは非常に心配し、母の家で付ききりで看病しました。私や妹の家に移って寝泊まりすることを、母は望まず、すぐよくなるからと言って聞きませんでした。そして、こんな忙しい時期に病気になるたびに私たちの重荷になってすまないと言っていました。何日か病に苦しむ日々が過ぎ、母の病状は好転したかに見えました。私たちは徹夜の看病からやっと解放されました。「クリスマスまでにはよくなるわ」と言っていた母の言葉は、実現するように思わ

れました。

母の容体が悪くなって1週間というものの、私の生活は負担を増し、より気ぜわしくなっていました。クリスマスの3日前、合唱団の方はふたつのクリスマスコンサートを終了したところで、私はまだクリスマスに備えて最後の買い物をしなければならず、会社の仕事もたくさん残っていました。それだけでなく、4日後にはイスラエルに旅立たなければなりません。そんな午後、夫が私の職場にやって来てドアを閉めると、母がほんの1時間前に亡くなったと告げました。私は彼が一体何を言っているのか理解に苦しみました。夫はどうしてそうなったのかという説明は一切せず、ただ母が亡くなったという絶望的な知らせだけを繰り返しました。その知らせを受ける何分か前まではあれほど大切だった仕事の数々が、すべて消えうせたように思われました。時間が止まってしまい、頭の中が真っ白になったようでした。

それからの2日間、私は妹たちとともにしかるべき手順を踏み葬儀の準備をしました。葬儀はクリスマスの翌日、実に合唱団がイスラエルに向けて飛び立つのと同じ日に行なわれることになりました。私たちは親戚や友人たちからあふれるばかりの愛と慰めを受けましたが、母の死という現実を受け入れるのに苦悶しました。そのような状況の中で、イスラエルへ旅行に出かけるのは無理だと思いました。ところが、ある夜遅く、私の出発を何日か後に延ばし、合唱団に合流できるように手配した、という電話がかかってきました。私はそのような思いやりのある友人たちがいること、私のために彼らがそれほどまでに力を尽くしてくれたことに心から感謝しました。

小さな子供たちのためだけでなく、自分たちのためにも、クリスマスをできるかぎりいつもと変わらないものにしてほしいと思いました。我が家で毎年伝統となっているクリスマスイブの食事会とクリスマスの準備は続けましたが、

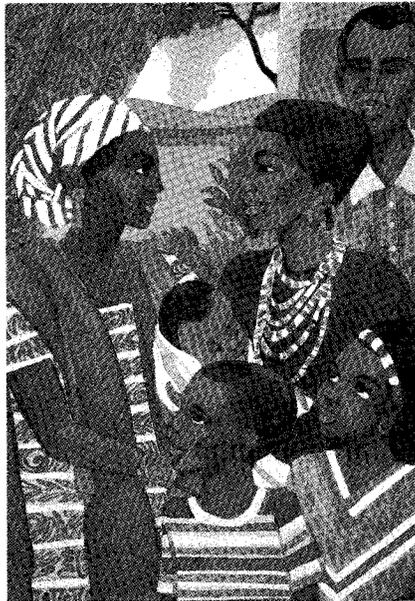
やはり非常にむなしく寂しい気持ちを感じずにはいられませんでした。とても例年と同じようなクリスマスを祝うのは無理でした。一人一人が、とりわけ子供たちが、たとえようもない寂しさを感じながら、母であり、祖母である彼女がどうしてこんな時に天に召されたのか必死に理解しようとしていました。

クリスマス休暇中ということで、故人との対面は葬儀のすぐ直前、つまりクリスマスの翌日まで延期した方がいいのではないかと周囲の声もありました。しかし、葬儀社の人たちからは、むしろ葬儀の前日であるクリスマスの日に時間を見つけて葬儀場に足を運び、ほかの人に煩わされることなく母との別れの時を過ごすように勧められました。そこで私たちは、クリスマスの夜の食事会が終わると、プレゼントで遊ぶ子供たちを家に残して葬儀場へと向かいました。

私たちはひつぎの前に静かにたたずみ、神殿着をまとった美しい母の姿に目をやりました。本当に安らかに幸せそうな顔をしていました。その部屋にいと、平安と愛、また、幸福と喜びさえ感じました。私は目を閉じて、きつつい最近天で起こったに違いない父と母の栄光に満ちた再会の場面を思い描いてみました。もし耳を澄ませて聞いたならば、はるか昔のあの聖なる夜に主を賛美した天使たちの歌声が聞こえてきそうです。そしてその中に父と母の美しい歌声も加わっているのではないかとこの気持ちになりました。ふたりが、「聖し、この夜……眠りたもう 夢やすく」と歌っているのが聞こえてくるようでした。

そこにいると、私が祈り求めていた理解と慰めがもたらされ、この世の煩いから解放されたように感じました。その聖なるクリスマスの夜、私は愛する人々とともに、天父が主の平安を与えてくださったことに感謝を捧げたのでした。□

誓約を交わした女性



ILLUSTRATED BY LORI WING

「もろびと、こぞりて迎えまつれ」と賛美され、「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える」(ルカ2:10, 下線付加)と告げられた、クリスマスの季節になりました。世界じゅうで私たちの救い主の喜ばしい誕生が祝われています。天父と御子が私たちの生活を、喜びに満ちた、意義深いものとしてくださる方法についてじっくりと考えてみるには、うってつけの季節ではないでしょうか。その方法のひとつは、誓約を守ることです。

マリヤが「わたしは主のはしめです。お言葉どおりこの身に成りますように」(ルカ1:38)と言った時、彼女は実際、天父に言われたとおりに行動することを約束し、誓約したのです。そしてこの誓約のゆえに、ひとりのガリラヤの娘にすぎなかった彼女は、思いもかけない喜びと意義のある人生を歩むこととなったのです。

誓約を守ることは喜びをもたらす

私たちが天父と交わす最初の誓約は、バプテスマの誓約です。この誓約により、私たちはキリストのみ名を引き受け、主に従うことを約束します。そして、聖餐を受けるときに、この誓約を新たにします。そうすれば、みたまが私たちとともにあると天父は約束していらっしゃいます。このみたまは、私たちを導き、失意のさなかにあっても平安を、また悲しみのさなかにあっても喜びを与えてくれるのです。神殿で交わす誓約は、さらに大きな知識と喜びをもたらしてくれます。

ガーナ出身の扶助協会の姉妹たちの

中には、苦しい状況の下でさえも誓約を守ることに喜びを見いだしている人々がいます。1989年、ガーナ政府は教会に対して門戸を閉ざし、末日聖徒が集会を開いて宗教活動を行なうのを禁止しました。教会員に対する迫害はひどいものでした。しかし、フォウスティーナ・オートゥー姉妹をはじめとする扶助協会の姉妹たちは、一層の献身を示しました。彼女はこう語っています。「こうしたことが起きているこの時代に生きていることをうれしく思います。いつも、『皆さんはこの国における開拓者なのです』と告げられてきました。」

ガーナの教会員はさまざまな方法で献身してきました。家族の祈りを捧げ、聖典を勉強し、教会歴史を学びました。ガーナのヌサワムで扶助協会会長を務めるエマ・トウエラボア・コデューア姉妹は、このように書いています。「私は活発な姉妹たちを訪問し続けていますが、皆とても元気です。……これまでの人生の中で、これほど一生懸命断食し、祈ったことはありません。私の信仰は非常に強くなりました。以前は腹を立てたことにも、今はもうな

んとも思わなくなりました。怒りや失望に悩まされることがもはやなくなったのです。これらはこの苦難に満ちた時に私が得た祝福のひとつです。」教会の集会に対する規制は1990年12月に解除されました。

●神と交わした誓約を守ることに喜びを感じたのはどのような時でしたか。

誓約は私たちが神に近づける

また、私たちはバプテスマの誓約の中で、ふたつの大きな戒めを守ることを約束します。ひとつは、神を愛することであり、もうひとつは、隣人を愛することです。(モーサヤ18:8-9参照)これらの誓約により私たちは神に近づくことができます。

ある若い女性は、自分が人を批判する態度を身につけてきたことに気づき、それが自分の霊的な成長を妨げていると感じました。そこで彼女は聖餐を受けるときに、今週1週間、家族を批判しないことを主に約束しました。彼女は毎週この約束を新たにし、みたまがともにあるように求めました。たやすいことではなく、また進歩はゆっくりでしたが、この欠点を乗り越えることができました。今、友達の間で彼女は、決して他人の悪口を言わない模範となっています。

神と交わした誓約に従って生活するにつれ、神の資質である善と、神に従う人々に約束された心の平安と喜びが、私たちの言葉と行ないに現われてきます。

●誓約を交わしたことは、天父の愛に対する理解を深めるうえでどのように役立っていますか。□



ジョセフ・ フィールディング・スミス

やさしい神の僕^{しもべ}



レオン・R・ハートション

「この世の悪を癒すのは、主イエス・キリストの福音をおいてほかにありません。平和への希望、この世での繁栄と霊的な繁栄を求める希望、またやがては神の王国に住みたいという私たちのその希望は、この回復された福音を通じて、またその中のみ見いだされるのです。」

第10代大管長であったジョセフ・フィールディング・スミスは、1972年4月の総大会で彼の最後の証を世に向けて述べる中で、このように語りました。そして、その3カ月後、世を去りました。

スミス大管長の証は、愛する主への

ジョセフ・フィールディング・スミスは少年のころ父親からモルモン経をもらい、10歳になるまでに、2回読み終えていた。

生涯にわたる献身によって培われており、偉大な先祖からの受け継ぎがその根底にあります。父親は1901年から1918年まで大管長を務めたジョセフ・F・スミスであり、予言者ジョセフ・スミスの弟、ハイラム・スミスは彼の祖父に当たる人です。

「母のひざの上で受けた教え」

ジョセフ・フィールディング・スミスは1876年7月19日、ソルトレークシティでジョセフ・F・スミスとユリナ・ラムソン・スミスの間に生まれました。彼の主への献身は幼い少年時代から始まりました。

「私は母のひざの上で、予言者ジョセフ・スミス^{あがな}を愛し、贖い主を愛するように教えられました」と、彼は後に語っています。「祖母である〔メアリー・フィールディング・〕スミスにつ

いては何も覚えていません。祖母は女性のうちで最も気品ある人だったと聞いているので、祖母について何も記憶にないことを、いつも残念に思っています。でも、祖母の仲良しの妹だったメアリー・トンプソンお婆さんのことはよく知っています。子供のころよく彼女の家に行き、ひざに乗せてもらっては予言者ジョセフ・スミスの話を聞かせてもらいました。あの経験にどんなに感謝していることでしょう。」

スミス大管長は、聖典を読もうという決心を、子供の時からしていました。妹のエディスによれば、彼は10歳になるまでにモルモン経を2回読んでいたとのことでした。

スミス大管長は幼いころを回想して次のように語りました。「私がまだアロン神権を受ける年齢にならないころ、父は私に1冊のモルモン経を手渡して、読むように言いました。私は感謝の思

いでこのニューファイ人の記録を受け取り、自分に与えられたこの課題に取り組みました。いくつかの聖句に深い感銘を受け、それらは忘れ難い経験となりました。」

学者として、指導者として

このように早くから聖典に親しんだことは、彼が生涯を通じて福音の博学な知識と聖典への理解を養っていくうえで、大きな助けとなりました。彼は49年間教会歴史家として働き、教会歴史と教義に関するその比類ない知識により、教会じゅうに知れ渡りました。1901年に最初の著書が出されてから1970年に最後の著書が出版されるまでの69年間で、彼は全部で25冊に及ぶ書物を著わし、その中の何冊かは聖典や教会歴史を学ぶ者にとって古典とも言えるものになっています。

教会歴史家、また学者としての働きに加え、ジョセフ・フィールディング・スミスは自分の祝福文が成就するのを目にしました。祝福師の祝福の中でこう言われていたのです。「あなたは、兄弟たちと評議員の座に着き、人々の中であって管理する義務を負うでしょう。」1910年、33歳で十二使徒定員会の一員として召され、それから60年以上にわたって主イエス・キリストの使徒として忠実に仕えました。十二使徒定員会の会長という重責を19年間担い、そのうち5年間は副管長としても働きました。この後1970年1月23日、93歳で大管長として聖任され任命されました。そして1972年7月2日、

95歳で亡くなるまでその任を果たしました。

温かい心

主の律法や原則を守るのに一步も譲らない態度から、スミス大管長を少々四角四面な人だと思う人もいました。しかし、実際の彼はまったく違いました。スミス大管長をよく知る親しい人々は、彼が他人に対して思いやり深く、大きな愛と憐れみと赦しの心に満ちた、非常に寛大な人物であることを知っていました。

スミス大管長の友人の何人かが語った次の言葉はそれをよく表わしています。「もし自分がだれかに裁かれなければならないのなら、ジョセフ・フィールディング・スミスに裁いてもらいたいものだ。」

1956年、十二使徒定員会の会員たちは、当時同定員会会長であったスミス大管長にあてた賛辞を発表していますが、その中にはほかの事柄とあわせて次のように記されていました。

「私たちは、全教会員にスミス長老の心の温かさ、彼が恵まれない人々や苦難を味わっている人々の安寧を非常に心にかけていることを知ってもらいたい、ひとえに願っています。スミス長老はすべての教会員を愛し、罪を犯してしまった人のために絶えず祈っているのです。」

優れた識別力をもって最終決定をする際に、スミス長老にはふたつの基準だけがあるように感じられます。ひとつは『大管長会は何を望んでいるか』

であり、もうひとつは『神の王国にとって何が最善であるか』です。」

陽気な一面

まじめで研究熱心な性格である一方、スミス大管長は陽気な一面も持ち合わせていました。機転の利いたユーモアのセンスがあり、それはしばしば実にいいタイミングで発揮されるのです。

こんなこともありました。ステーキ部大会の責任を終えてカリフォルニアから戻ってきた時、スミス大管長は弁当の入っていた袋に、自分で摘んだオリーブをいっぱい詰めて持っていました。宝物を手にして上機嫌の大管長は、いつものようにみんなと分かち合おうとして兄弟のひとりにこう尋ねたのです。「もぎ取ったばかりのオリーブの実を食べたことあるかい。」何も知らずに犠牲者となったその兄弟は、もぎたての実をひとつ取るとがぶりと一口かじりました。彼にとっては苦い経験となってしまったのですが、兄弟が苦さのあまり顔をしかめるのを見て、スミス大管長は平気な顔で尋ねました。「どうしたんだい？ よくないのを取ったんじゃない？ ほら、もうひとつこっちのを試してみたら？」

心やさしい夫

ジョセフ・フィールディング・スミスは、教会での責任に加えて、夫、そして父親としての責任も熱心に果たそうとしました。1898年4月、22歳の彼はルーイー・エミラ・シャートリフ姉妹



ジョセフ・フィールディング・スミスは教会の教義と歴史に関するその比類ない知識により、広く知られていた。彼の著わした最初の本は1901年に、最後の本は1970年に出版された。彼は手動のタイプライターでこつこつと原稿を書いていった。

と結婚しました。結婚してわずか1年後の1899年5月12日、父親から七十人に聖任され、明るく日には伝道に旅立ちました。今の私たちが同じ状況に置かれたとしたら、非常にむずかしいことだと思いますが、当時のスミス長老にとってもこのような犠牲を払うことは容易なことではありませんでした。彼は召しを受け入れ、イギリスのノッティンガム地区で2年間働き、1901年6月に帰国しました。

伝道から帰った彼は教会歴史家事務局での勤務を引き受け、以来その人生の大部分をここで費やすことになりました。1907年にはさらに大きな、ユタ州系図協会書記としての責任を受けました。

ジョセフ・フィールディング・スミ

ス大管長と最初の妻、ルイーとは10年近くをともに過ごし、その間にふたりの娘が生まれました。そして彼が十二使徒定員会の一員になる2年前、ルイーは亡くなりました。

1908年11月2日、彼はエセル・ジョージナ・レイノルズ姉妹と再婚して29年間をともにし、ふたりの間には5人の息子と4人の娘が生まれました。エセルは1937年8月26日、この世を去りました。

その後スミス長老は声楽家としてよく知られ、タバナクル合唱団の一員でもあったジェシー・エバンズ姉妹と1938年4月12日、再婚しました。活気に満ち、愉快で天性のエンターテイナーであった彼女は、スミス長老の傍ら

に33年間寄り添い、まさに美しいまでの愛と献身によって彼を支え、いたわり続けました。また、大管長となり教会の責任を果たす彼に同伴してさまざまな地域に赴き、過密なスケジュールをともにこなすと同時に、多くの国々で聖徒の温かい歓迎を受けました。1971年8月3日、心臓発作で彼女が世を去った時、何百万という人々がスミス大管長の悲しみと寂しさをともに味わいました。

この苦難の時にあって、当時彼の副管長であったハロルド・B・リー長老は、^{はんりよ}伴侶を亡くした予言者の悲しみを思い、同情の気持ちを彼に告げました。スミス大管長はこの友に、主が自分の責任を果たせるように力を与えてくださるだろうと答え、「この悲しみは前にも乗り越えましたから」と語ったということです。

「私の知っているあの人は 実にやさしい人です」

ある人を最も的確に表現するのはその人と生活をともにしている人の言葉でしょう。1932年、妻のエセルはこう語っています。

「私の知っている夫について話すようにということですが、私は夫が亡き人となった時、人々は夫のことを『実に立派な人、誠実な人、正統派の人……』などと言うだろうと、よく考えます。人々は夫の公衆に知られている面を取り上げてこう言うことでしょう。でも一般の人々が心に抱いている彼と、私の知っている彼の間には大きな違い



スミス大管長は、プロの歌手であった伴侶、ジェシー姉妹とよくデュエットを歌い、聖徒たちを喜ばせた。1971年、明るく愛にあふれた彼女のひととなりを知っていた多くの人々は彼女の死を悼んだ。

があります。私の知っている主人は親切で思いやりの深い夫であり、父親です。人生における主人の第一の望みは、幸せな家庭を作ることであり、そのために我を忘れて力を注ぐのです。主人はぐずる子供を寝かしつけ、幼い子供たちにおとぎ話をして聞かせるような人です。またどんなに疲れていようと、多忙であろうと、夜遅くまであるいは朝早くから面倒な学校での問題を解決するために年長の子供たちの相談に乗るのです。だれかが病気になれば、苦しむその子をやさしく見守り看病します。子供たちが泣いて呼び求めるのは父親であり、病気の子供たちにとっては父親こそ万能薬なのです。傷に包帯を巻く父親の手、苦しむ者に勇気を与えるその腕、子供が過ちを犯したときにやさしくいさめる声、そのような父親に恵まれた子供たちは、父親を喜ばせることをするのが自分たちの喜びでもあると知るようになるのです。

私の知っているあの人は実にやさしい人です。だれかの感情を害してしまったと感じたときには、どんなに遠方であっても出かけて行って、思いやりのある言葉や親切な行ないによってその償いをするのです。彼はまた、若者の訪問を大歓迎しました。そして、彼らとその日の出来事、たとえばスポーツや彼らの一番の関心事などについて話し合うことが何よりも楽しみでした。主人は楽しい話が好きて、その場のユーモアを解すのが実に早く、笑ったり、笑わせたりしていました。いつも健全な活動に率先して加わっていました。

私の知っている主人は非利己的で、

愚痴はこぼさず、思慮深く、思いやりのある、心のやさしい人です。愛する者がこの上ない喜びに満ちた人生を送れるようにと精いっぱいのことをしてくれる人です。私の知っている主人はこのような人です。」

「わが主を
どんなにか愛していることだろう。」

スミス大管長の息子のひとは、父親の人格と、内に秘めた偉大な力の源について心に迫る思い出を語っています。

「私たちはよく父が『主が私たちのために、試練や苦難、そして罪をその身に負ってくださったことを世の人々

が悟ってくれさえしたらよいのだが』と語るのを耳にしました。このことを話すときの父の目にはいつも涙が光っていました。

数年前、書斎で父とふたりきりでいる時のことです。父は瞑想にふけていました。私はその静寂を破らないようにと黙っていましたが、やがて父が口を開き、こう言いました。『先週の木曜日、神殿で教会幹部の兄弟たちと集会を開いたのだが、おまえもその場に居合わせていたらどんなによかっただろうと思うよ。兄弟たちが、主であり救い主であられるイエス・キリストへの愛を証するのを聞かせたかった。』そう言って頭を垂れた父のほほを涙が伝い、服に落ちました。それからしば

らくたった後、頭を下げたままうなずいてこう言ったのです。「ああ、わが主、救い主イエス・キリストを私はどんなにか愛していることだろう。」

社会においても教会においても広く知られていた彼の働きは、高齢となってもとどまることを知りませんでした。大管長として福音の証を分かち合いながら各地を訪れました。彼が大管長の職にあった時に、教会で最初の地域大会がイギリスのマンチェスターで開かれ、オグデン神殿とプロボ神殿が献堂され、アジア初のステーキ部が東京に設立されました。また月曜日が家庭の夕べの日として定められ、台湾伝道部が創設され、教会社会福祉部が再組織されました。さらにイタリア北伝道部が創設され、日曜学校が再組織され、教会内通信管理部が設立されました。

彼にとって最後の総大会の説教の中で、このやさしい、愛に満ちた主の僕は、自分自身の経験から次のように語りました。「私たちのだれもが携われる仕事のうちで、福音を宣べ伝え、この地上に教会、すなわち神の王国を打ち建てていくことほど重要な業はありません。」

スミス大管長はまさにこの最も重要な業のために生涯を捧げた人でした。彼はこう語っています。「私は生涯、福音の原則を学び、それについて深く思い計り、主の律法に従って生活するように努めてきました。そのおかげで、私の胸には主と主の業に対する愛、そしてこの地上で主の目的をさらに果たそうとする人々すべてに対する愛がはぐくまれたのです。」□

ジョセフ・フィールディング・スミス年表 1876—1972

年	年齢	出来事
1876		7月19日 ソルトレークシティーで生まれる。
1897	21	長老に聖任される。
1898	22	4月26日 ルイー・エミラ・シャートリフと結婚。
1899—1902	22—24	イギリスで伝道する。
1901	25	教会歴史家事務局の書記となる。
1906	30	教会歴史家補助となる。
1908	32	最初の妻ルイー死去。 11月2日 エセル・ジョージナ・レイノルズと結婚。
1910	33	4月7日 父親により使徒に聖任される。
1919	43	ソルトレーク神殿の副神殿長となる。
1921—70	44—94	教会歴史家として働く。
1934	57	系図協会会長となる。
1937	60	ふたり目の妻エセル死去。
1938	61	4月12日 ジェシー・エラ・エバンズと結婚。
1939	63	第二次世界大戦に先立ってヨーロッパを回り、ヨーロッパ以外の地域出身の宣教師全員の引き揚げを指揮する。
1945	68	ソルトレーク神殿の神殿長となる。
1951	74	十二使徒定員会会長となる。
1955	79	極東を旅行し、福音伝道のために4カ国を奉獻する。
1965	89	デビッド・O・マッケイ大管長の第一副管長となる。
1970	93	大管長として支持される。
1971	94	イギリスのマンチェスターにおいて、教会初の地域大会を管理する。3人目の妻ジェシー・エバンズ・スミス死去。
1972	95	7月2日、ソルトレークシティーにて死去。

参考文献

1. ジョセフ・フィールディング・マッコンキー「ジョセフ・フィールディング・スミス」『教会の大管長』レナード・J・アリントン編
2. 「ジョセフ・フィールディング・スミス」『モルモニズム百科辞典』
3. 「ジョセフ・フィールディング・スミス」『神の王国を出て行かせたまえ』
4. プライアント・S・ヒンクレー「ジョセフ・フィールディング・スミス」『インブルームメント・エラ』1932年6月号, p. 459

主は生けりと知る

主は生きておられ、私たちが愛してくださっています。

主の愛がいかに深いかを知ったのは、私がいちばん助けを必要としていた時でした。

サリー・J・オダカーク



ある日の早朝セミナーで、救い主をテーマにして特別な開会行事が行なわれました。司会の少女がキリストについて証を述べました。そして出席者全員に各自のキリストに対する思いを分かち合うように言いました。教師のプラット兄弟も自分の証を付け加えた後、キリストが私たち一人一人のため

に命を捧げてくださったことをはっきりと知る必要があると言いました。

友人たちの証を聞いているうちに、私には救い主に対する確かな証がないことに気づきました。それまでも日曜日の集会やセミナーのクラスには欠かさず出席していましたし、イエス・キリストは天父の御子であり、私たちが模範として従うべきお方であると思ってきました。しかし私は、キリストが確かに自分の救い主であり、救いを得るうえで欠かせないお方であることに気づいていなかったのです。

その朝のセミナーではなんとか短い証をして切り抜けましたが、以来、この経験について思い起こし、個人的な証を得られるようにと祈る日々が何日も続きました。やがて、教会は真実であり、その教えに従って生活すべきであるという温かい気持ちを感じるようになりました。私はその祈りの答えに元気づけられるとともに、福音に対する基本的な証を持ち続け、教会の標準にしっかりと従って生活していけばそれでじゅうぶんであると思うようになりました。とはいうものの、依然として救い主の大切さは悟れないままでした。

それから数年後、家を出てひとりで生活していた私に、精神的にも霊的にも大きな苦痛を伴う、重大な危機が訪れました。こんな時の導きとなるはずのキリストに対する信仰がなかったため、ひとりで取り残されたような気持ちを味わっていました。そのうち祈りも怠るようになり、もう教会に行くのはよそうと思うようになってしまいました。ホームティーチャーのダンとテリーが訪ねてくれたのは、私の人生のまさにそのような時期でした。

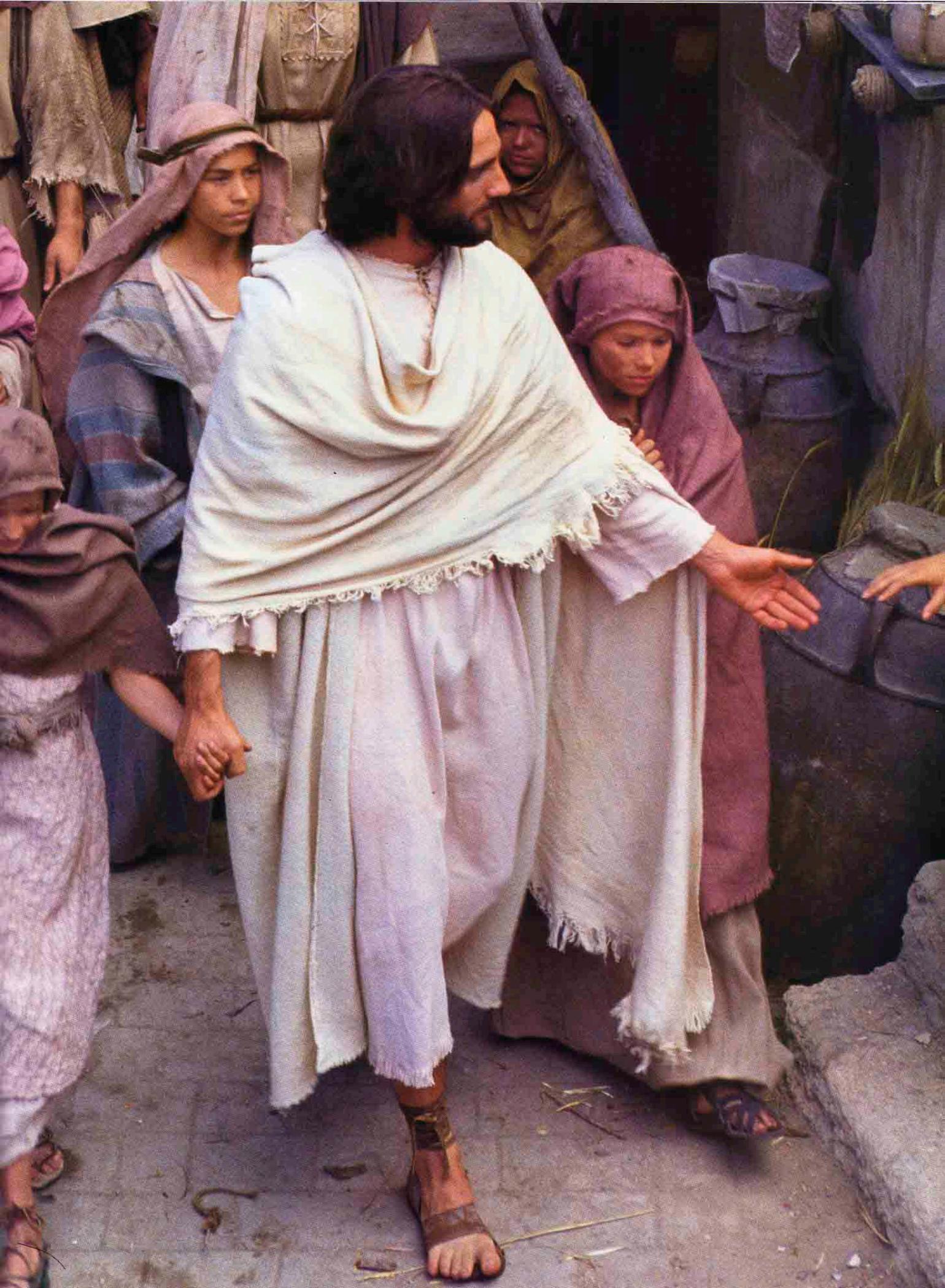
その日も私は、さしたる理由もなしに教会を休んでいたため、いささかばつの悪い思いをしました。彼らは、私が非常に深刻な状態にあるというみたまのささやきを受けており、私のために用意した特別なレッスンを、ぜひ聞いてほしいと申し出ました。彼らはしばらく私と話した後、帰り際にとっても力強い祈りをしてくれました。彼らが去った後もしばらくみたまがその場にありました。そして、それまで長い間抱えてきたよりもずっと大きな希望が胸にあふれてきたのです。

私はそのみたまをいつまでも感じていたいと思いました。そこで心の中にかすかに残っていた信仰を呼び覚まし、祈りを捧げました。もう随分前から祈っていなかったため、答えが与えられるという望みも期待も抱いていませんでした。ところが、ひざまずいて祈り始めると心の黒雲は瞬く間に取り払われ、心の内に熱い思いがわき上がってくるのを感じたのです。主の完全な愛と深い憐れみが部屋じゅうに満ちました。キリストは私を覚えてくださっている！ 私は救い主の深くて力強い愛に圧倒される思いでした。

主がさまざまな問題を抱えている私をやさしく見守ってくださっていることが、何の疑いもなくはっきりとわかりました。突然、私の心の中に「今こそ立ち直りなさい」と告げる声が聞こえてきました。さらに救い主は、私に必要なあらゆる助けを与えると約束してくださいました。愛にあふれた天父と救い主イエス・キリストは確かに生きておられ、私たち一人一人をよくご存じなのだ。この経験を通して知りました。私たちが天父と御子への信仰を働かせるなら、おふた方が私たちに必要な助けを与えてくださることもわかりました。どんなことがあろうとも常に祈る必要があることも知りました。

克服すべき問題が消え去ったわけではありませんでしたが、救い主がそばにおられ、いつも助けの手を差し伸べようとしていらっしゃるのを知ったのです。その日以来、苦難に遭ってもひとり取り残されたように感じることはなくなりました。

賛美歌の言葉に倣って、私も今、心からの感謝をもって言うことができます。「主は生けりと知る」と。□



ベツレヘム への道

ロ・ケリー・オグデン

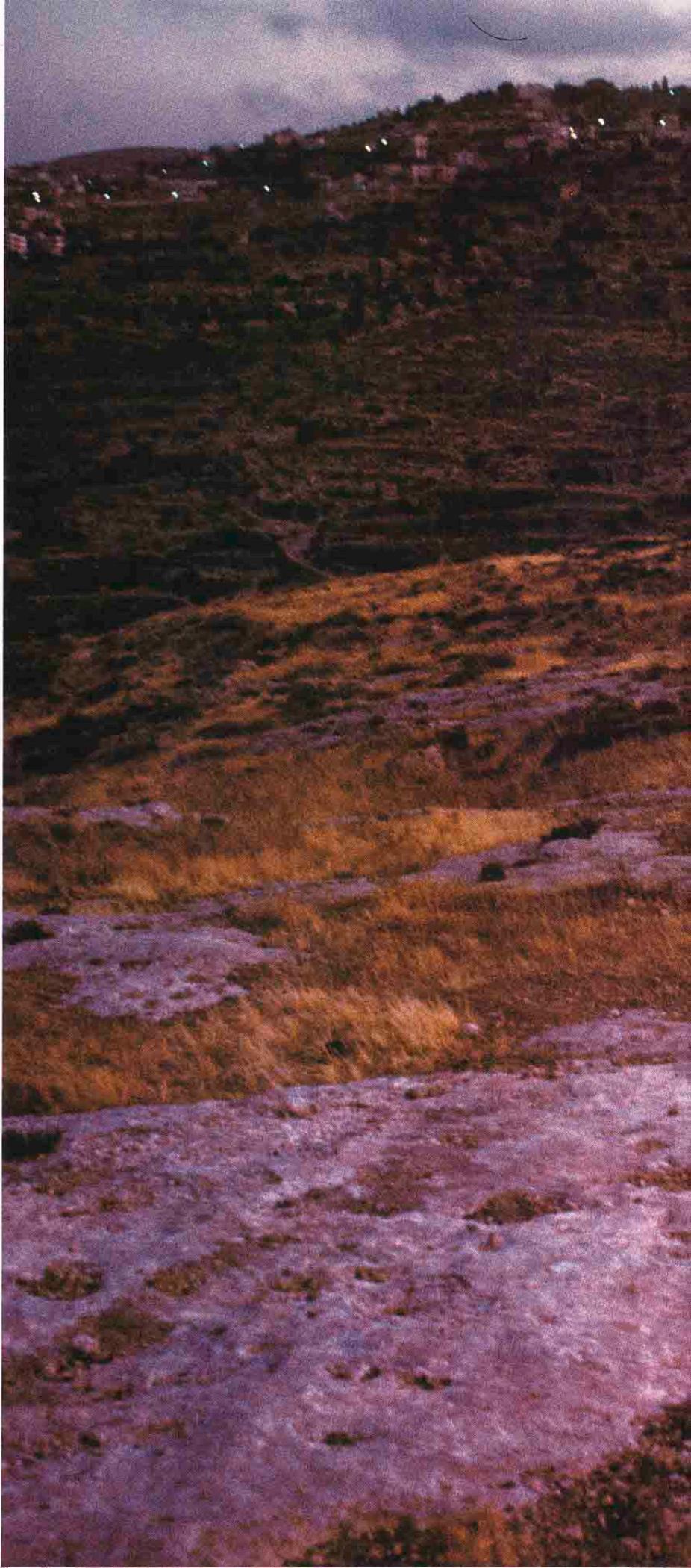
最近私は、マリヤとヨセフがナザレからベツレヘムまで特別な旅をした、あの道を歩いてみました。

何世紀にもわたって、ユダヤ人たちは、メシヤについて語ったイザヤの偉大な約束が実現する日を待ち望んでいました。その約束とは、ひとりのおとめがみごもって男の子を産み、その王国はダビデの位の上に永遠に立てられる、という予言でした。(イザヤ7:14; 9:6-7参照)

天使ガブリエルが訪れて、その予言が成就する日の到来を、すなわち、世の歴史上、最も大いなるお方がお生まれになることを告げたのは、ナザレというガリラヤのへんびな町でした。ガブリエルは、天の神がこの世に御子を遣わしたまい、マリヤがこの神の御子の母となると告げ知らせたのです。(ルカ1:35参照)

ベツレヘム郊外の羊飼いの野。ヘブライ語で「ベツレヘム」とは「パンの家」という意味である。「命のパン」(ヨハネ8:35)であったキリストの生誕の地にふさわしい地名である。キリストの先祖に当たるダビデもここで生まれ、父親の羊の番をし、そして、「主はわたしの牧者」(詩篇23:1)と歌った。

PHOTOGRAPH BY BRIAN KELLY







復元されたヨセフとマリヤの時代のガリラヤ地方の家(左)。このような家の部屋の中で、ガブリエルがマリヤに「あなたはやがて神の御子を産む」と告げたのである。

エズレルの谷(右上)。ヨセフとマリヤは、おそらく、ナザレから南東の方向に出て、この谷を16キロほど歩いて横断したものと思われる。ここは、旧約聖書の中の数多くの出来事の舞台となった場所である。ギデオンが300人を選び出したのも、サウルが戦死したのも、エリヤがアハブとイゼベルに対して予言したのも、みなここであった。

ヨルダンの谷の中ほどの景観(右下)。ヨセフとマリヤは、この谷をおよそ80キロほど歩いて南下したと考えられる。写真には写っていないが、ヨルダン川が谷の真ん中をくぼみに沿って流れており、ヨセフたちの通った道も川に並行して続いている。イエスは後に、エリコの東のヨルダン川でバプテスマを受けている。



PHOTOGRAPH BY D. KELLY OGDEN



PHOTOGRAPH BY D. KELLY OGDEN



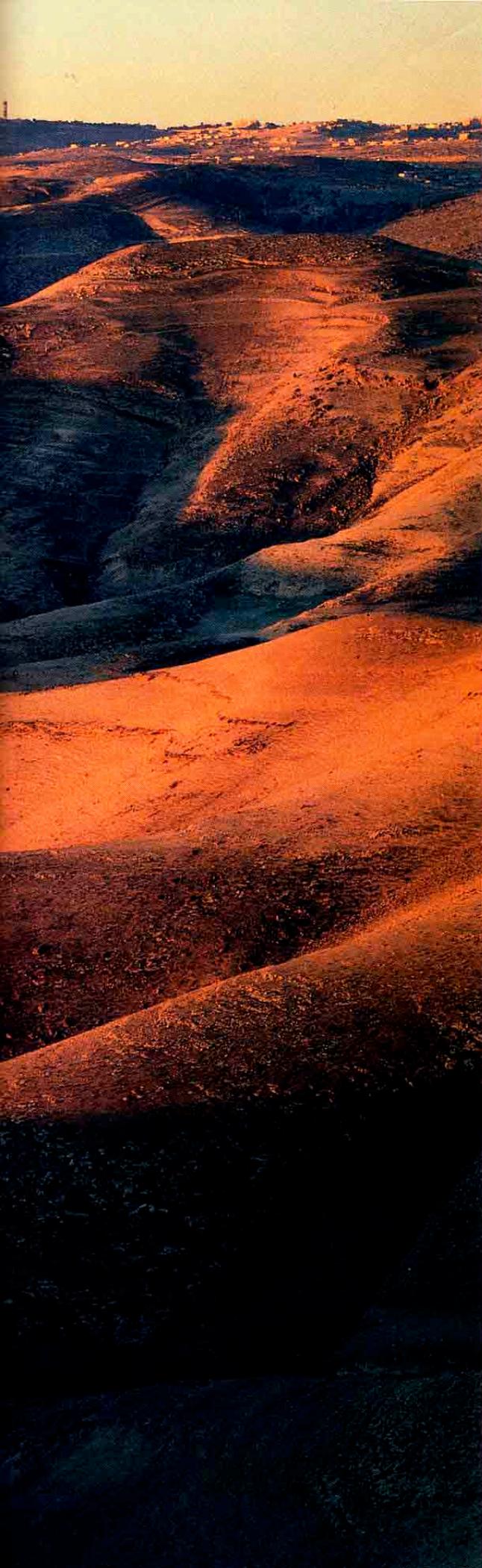
メシヤがナザレでお生まれになること(I ニーファイ11:13-21参照)と、ナザレ人と呼ばれるようになることは(マタイ2:23参照)、すでに予言されていました。イエスはそのナザレで母の胎内に宿り、少年時代を過ごし、予言を成就されたのでした。

しかし、ほかにも成就を待つ予言がありました。それは、約束されたメシヤはユダヤのベツレヘムでお生まれになるという、よく知られた予言でした。(ミカ5:2; ヨハネ7:42参照)初子の出産を間近に控えたマリヤは、なん

としても自分の母親や家族の住む実家の近くにいたいと思ったことでしょう。しかし、それでは、ベツレヘムでメシヤがお生まれになるという予言は、どうしたら成就するのでしょうか。ふたつの町は160キロも離れているのです。この時、ローマの為政者たちが徴税のために人口調査をしようと決断したのは、偶然のことではありませんでした。こうして、国じゅうの人々が、先祖の地へ戻って行ったのです。

ヨセフとマリヤは、ベツレヘムへ下るために、長くつらい旅に出なければ





なりません。聖典では、この旅について触れているのは、ほんの数行でしかありません。

「ヨセフもダビデの家系であり、またその血統であったので、ガリラヤの町ナザレを出て、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。

それは、すでに身重になっていたいなづけの妻マリヤと共に、登録をするためであった。」(ルカ2：4-5)

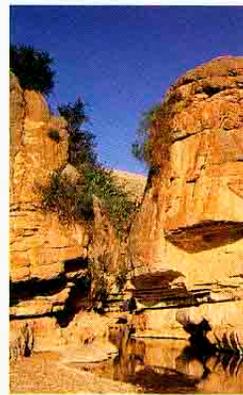
ナザレからベツレヘムへ行くには、街道がふたつあり、ふたりは、そのどちらかを通して行ったことでしょう。ひとつは、エズレルの谷を南下し、さらにサマリヤの山々を抜けてユダヤに入る道です。この道の方が、ふたつの町を結ぶ直線に近い道筋なのですが、次に述べるふたつの理由で、ヨセフとマリヤはおそらくこの道を通らなかった

ユダヤの荒れ野。地平線のかなたに見えるのがオリブ山(左)。エリコからエルサレムまでは、距離にして27キロあり、また標高差1,070メートルの険しい上り道である。イエスが後に40日40夜にわたる断食をされたのも、この荒れ野である。

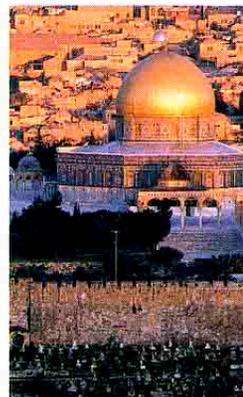
ユダヤの荒れ野にあるケルトの泉(右上)。ヨセフとマリヤも人里離れた荒野を進む途中にここに立ち寄り、冷たい水で喉を潤したことだろう。

神殿跡地(右中)。現在は、岩石のドームと呼ばれるイスラム教の寺院が建っている。ここはかつてヘロデ王が神殿を再建した場所である。ヨセフとマリヤもベツレヘムへの旅の途中、ここエルサレムを通った。

南側から神殿に通じる大きな階段(右下)。イエスの誕生後、5、6週間ほどして、ヨセフとマリヤは、祝福を授かるためにイエスを神殿に連れて行った。イエスは後に、この階段上でも教えを説かれたかもしれない。



PHOTOGRAPH BY NEIL FOLBERG



PHOTOGRAPH BY NEIL FOLBERG



PHOTOGRAPH BY DENIS WAUGH



たものと思われま。ひとつは、この道が、絶えず上り下りのある山道で、体力的に見て厳しい道だということです。もうひとつは、その山道を過ぎると、旅人はそのままサマリア人の国に入ってしまうということです。「ユダヤ人はサマリア人と交際していなかった」(ヨハネ4:9)のです。

したがってヨセフとマリヤは、もう一方の道を旅して行ったのではないのでしょうか。この道はエズレルの谷を南東に下って、ヨルダンの谷まで行き、その後、平坦な道か、やや下り気味の道をエリコまで進み、それからユダヤの荒れ野を通して、エルサレム、そしてベツレヘムへと入る道です。

私は、自分自身でこのふたつの道の状況を把握してみたいと思い、最近、両方の道を歩いてみました。両方とも、距離にすると約148キロあります。普通に人が歩く速度は、時速約5キロで、らくだやろばに乗った場合でも同じくらいの速さです。そうすると、旅行者は普通、1日27キロから38キロ歩けることになります。私の場合、両方とも、それぞれ歩いて約30時間かかりました。5日間で、1日27キロから32キロ歩いたのです。

その速度で歩いたと仮定すると、ヨセフとマリヤの場合、少なくとも4日から5日かかったと考えられます。ふたりが毎晩どこで休んだのか、興味のあるところ。道中、どこで、ある

いはだれと野宿したのでしょうか。だれにとっても、苦しい旅だったに違いないのですが、出産を間近に控えた身重の女性にとっては特につらい旅だったでしょう。時期は早春でした。早春といえば、山国にあっては、夜になるとまだかなり冷え込む季節だったはず。しかし、ヨルダンの谷では、海拔以下の地帯であったせいもあって、気温は比較的穏やかで、過ごしやすかったかもしれません。

この旅は最後の部分が一番の難関でした。エリコは地上で最も低い所にある町です。そして、エルサレムとベツレヘムは、いわば、山の頂にある町です。エリコから砂漠地帯を抜けてベツレヘムまでは、標高差にして約1,070メートルの開きがあります。マリヤは到着した時には疲れ切っていたはず。だからこそ、ヨセフは宿屋のどこかにゆっくりと休める部屋をぜひとも見つけたかったのです。

適当な場所がどうしても見つからなかったために、ふたりは、やむなく、馬小屋として使われている石灰岩の岩屋で、身を休めることにしたのかもしれませんが。キリスト教の教会としては最古の教会であるベツレヘムの降誕教会は、ちょうどそのような洞穴の上に建てられています。そして、世界じゅうの数多くのキリスト教徒たちが、この場所こそイエスのお生まれになった場所であると考えているのです。

あの聖なる夜、ひとりのみ使いがベツレヘム郊外の野にいた羊飼いたちの元に現われ、御子が今まさにお生まれになったと告げます。「きょうダビデの町に、あなたがたのために救主^{すくいぬし}がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。」(ルカ2:11)

救い主がお生まれになったというみ告げは、羊飼いたちにとっても、ほかのユダヤ人にとっても、それほど大きな驚きではなかったはず。それは、彼らが、ローマの圧政から救い出してくれる救い主の降誕を、一日千秋の思いで待ち望んでいたから。また、キリストという言葉が告げられた時も、大きな驚きではなかったでしょう。「キリスト」という言葉は、ヘブライ語の「メシヤ」という言葉とまったく同じ意味を持つギリシャ語で、「油注がれた者」という意味です。ユダヤの民はメシヤの降誕を長い間待ち望んでいたのです。

しかしこの羊飼いたちは、「主」という言葉に厳粛な響きを感じたことでしょう。「主」とは、エホバ、創造主、シナイ山でモーセに律法をお授けになったお方、そして神に対する称号であって、そこから8キロほど離れた神殿の中で礼拝されていたお方だったから。

こうして大いなるエホバが、ベツレヘムのみどりごとしてお生まれになったのです。□

ベツレヘムにある、家畜を飼っておくために使われた岩屋。神の御子であり、世の造り主であるお方は、このような実に質素な場所でお生まれになった。



えらくすばらしい クリスマスメッセージ

アルマ・J・イエイツ

「いいメッセージだったよ。」ビルが声をかけました。ぼくはビルのくすんだ緑色の古ぼけたプリマス車から降りて、凍るような夜の寒さにコートをしつかりと押さえたところです。ビルはささくれて油で汚れ、皮膚が角質化した手をハンドルの上で組み、道の向こうの暗やみをじっと見詰めていました。ビルが何を考えているのか、ぼくにはいつも見当が付きません。秘密は全部、ビルの白髪交じりの短髪の下にある、大きくて革のような皮膚をした顔の奥にしまい込まれているのです。

「あんたみたいに聖典に詳しくなれたらなあ」と、ビルは首を振りながらつぶやきます。「だけど今さら勉強するには年を取りすぎているし……。」あきらめたようにそう付け加えると、せき払いをし、しわがれた声で含み笑いをしました。「ディーゼルエンジンのことだったらいくらでも教えてやれるが……50年以上もエンジンとかかわってきたんだからな……。だけど聖書のようなものは勉強したことがないんだよ。」そして、ため息交じりにこう言いました。「えらくすばらしいメッセージだった。」

ぼくはこぶしを口に当てて神経質にせきをし、早口におやすみとつぶやきました。ビルと一緒にいると、いつもなんと言ったらよいのか言葉に迷うのです。ビルのことは子供の時から知っています——ずっと同じ通りに住んでいたことだってあるのですから。それなのに、ビルといるとどうしても気詰まりなのです。

車のドアを強く閉めると、ぼくは玄関に向かって歩き始めました。ふと目をやると、入り口の明かりが、霧のような降り続く雪に煙って見えます。ぼくは襟に深く首をすぼめ、吹きつける雪を突いて、前かがみに歩きだしました。

「やあ早かったね、ダニエル。」父が声をかけました。ぼくはコートを脱ぐと、解けかかった雪を払いました。「ホームティーチングはどうだった？」

ぼくは肩をすくめると、「いつもと同じさ」と不機嫌に答え、ソファに崩れるように座り込むと目を閉じました。

「レンチャー姉妹は元気そうだったかい。」

「前よりずっといいと言っていたよ。少なくとも歩行器で立って動けるからね。」しばらくふたりは黙っていましたが、やがてぼくはまるで独り言のようにこう言いました。「とにかく、ビルとホームティーチングをしていいことがひとつあるよ。ビルが話す気分じゃないときは、——たいていそうなんだけれど——ご主人を亡くした女性3人を30分で訪問できるんだからね。きっと記録的な速さだよ。」

紙の落ちる音がしてぼくは目を開けました。父が読んでいた新聞をひざに落としたのです。父はぼくをまじまじと見て、「ビルがどうかしたのかい」と尋ねました。

ぼくは大きくため息をついて言いました。「なんでもないよ。たぶんね。ぼくが自分で何もかもしなきゃならないのさえ気にしなければね」と皮肉を込めて付け加えました。「ビルがすることっていったら、迎えに来てクラクションを鳴らすだけ。毎月第2水曜日にさ。世の中には絶対変わらないものがいくつかあるけど、ビルの



鳴らすクラクションもそのひとつだね。約束をするってことがないんだ。ビルがいつ現われるか第六感で知ってなきゃいけないのさ。でも、それ以外は全部ぼくの仕事。話すのもぼく、レッスンをするのもぼく、何もかもね。」

「だけど、一体ビルはなぜホームティーチングをするんだろう」と、ぼくは急に不思議になって尋ねました。

「なんだって？」と父が聞き返しました。

ぼくは肩をすくめ、座り直しました。「3カ月前、監督がビルとぼくをホームティーチングの同僚に組み合わせてからというもの、そもそもなぜビルが訪問に出かけるのかも疑問に思っていたんだ。ビルって教会に来たことがあるの？」

父は読んでいた新聞を、今度は床に落としました。「以前はときどき来ていたんだよ。奥さんのティリーが卒中で倒れるまではね。でも、修理工場で汚れた作業服を着込み、ひじまで油にまみれて働いている方が前から性に合っているようだったね。」

「わかるよ」とぼくは心得顔で言いました。「ビルはいつだって古いエンジンみたいなにおいがするからね。手は油の染みだらけ。」ぼくは少しためらってからこう尋ねました。「ビルってたばこを吸うよね。」

父はぼくの方を見て肩をすくめました。「見たことはないよ。」

「見なくたってわかるよ。ヤニで黄ばんだあの指を見ればね。たばこのにおいがしないように、あの緑色のひどいの

どあめをしゃぶっているし。だから、どうしてクラーク監督がビルをホームティーチャーに召しているのか、ぼくには理解できないんだ。」

「ホームティーチングを受けているあの3人の姉妹たちは何も不満がないようだよ」と父は言いました。

「だけど、ホームティーチャーは模範を示すはずでしょう。ぼくがビルを教会に戻るように助ける機会だなんて言わないでよ。そんなことあり得ないって、お父さんだって知っているはずだよ。」

「もしかしたら主は、ホームティーチングがビルのよい働き場所だと思っただけじゃないよ。」父はまじめな顔で言います。

「よい働き場所だって！」ぼくはショックを受けました。「ビルは完全なお休み会員なんだよ！」

「ビルから学ぶことがあると思うよ。」

「ぼくはディーゼルエンジンの整備士になるつもりはないよ。」

「福音について学ぶことがあるかもしれない、ってことさ。」

「ビルから？」ぼくは信じられない思いで聞き返します。

「きっと今まで1度だって聖典を読んだことがないと思うよ！」

「おまえはビルを知らないんだよ。ビルが主のみに立つときに、主は油まみれの手と黄ばんだ指をご覧になるとは思えないがね。」父は、せき払いをして話題を変えました。「明日の朝、また弟の代わりに新聞配達してくれるかい。まだどの痛みがひどいし、かなりせき込んでいるんだよ。」

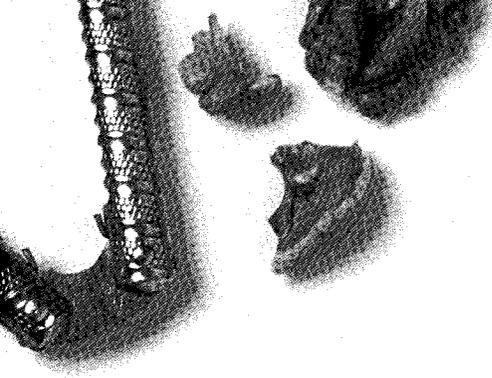
翌朝ぼくは5時少し前に起き、ヘラ

ルド新聞の束を車の後部座席に投げ込みました。夜のうちに雪はやんで、湿った柔らかい雪が辺りを一面の銀世界に変えています。ぼくは車庫前の道に目をやり、出かける前に数分時間を割いて雪かきをすべきか考えました。寒さで感覚のなくなった指に息を吹きかけ、足踏みして靴から雪を落としながらぼくは首を横に振りました。時間がない、というのがその理由です。それに、雪にはまらずに車を出す自信があったのです。

最初の配達先はレンチャー姉妹の家です。ほとんどの家では玄関の中に新聞を配達することはしません。単に玄関の方角に向かって新聞を投げるだけです。でもレンチャー姉妹は体が自由にならなかったため、特別扱いです。ぼくは後部座席から新聞を取ると、車から降り、玄関前の階段までダッシュしました。ところが玄関に通じる歩道の前でぼくは目を見張りました。玄関までの道も階段も、きれいに雪かきされているではありませんか。腕時計は5時15分を示しています。「今朝随分早起きした人がいるな」と独り言を言いながら、ぼくはきれいに雪が片付けられた道を歩いて玄関まで行き、防風扉を開いて新聞を入れました。「もしかしたらレンチャー姉妹は思っていたより随分上手に歩行器で歩き回れるのかもしれないな」とぼくは笑みを漏らしました。

「早かったね。」1時間半たって寒い外から駆け戻ると、父が声をかけました。父はちょうど仕事に出かけるのにコートを着て、アタッシュケースに書類を詰めているところです。

「すごい雪だよ。夕べ寝ている間に



また10センチは積もったみたいだよ」とぼくが言うと、「もちろん玄関と車庫前は雪かきしてくれたよね」と父は冗談を言います。

「朝の3時にでも起きろって言うの」とぼくも笑顔を返します。「新聞を配達できただけでもラッキーだったよ。だけど、随分早起きの人もいたよ。レンチャー姉妹の所は完璧にきれいに片付いていたからね。」

父はほほえんでいます。「ハッチ姉妹とバラード姉妹の所はどうだったかい。」

「お父さん、ぼくはホームティーチングじゃなくて新聞配達に行ってたんだよ。そっちには行ってないよ。」

クリスマスを一週間後に控えた次の火曜日、ぼくはヤングアダルトのクリスマスパーティーに行くために自分の部屋で支度をしていました。キャロリングをして、その後トレイシー・ヒースの家で食事をしながら楽しい時間を過ごすことになっていたのです。一番厚手の靴下に長靴を履いたところで車のクラクションの音がしますが、ぼくは無視して支度を続けていました。すると廊下から母の声がします。「ダニエル、今晚ホームティーチングに行くことになっていたの?」

「今晚? そんなことないよ。ヤングアダルトのキャロリングパーティーに行くことになっているんだ。」

「ビルが家の前で待っているみたいよ。」

「ビルだって?」とぼくは廊下を歩きながら息を飲みました。「今月のホームティーチングの訪問は済んだんだよ。本当にビルなの?」

「あの黒いフォードのトラックはビ

ルのでしょう。」

ぼくは急いでキッチン窓の曇りをふいて外を見ます。ビルのトラックに間違いありません。1963年型の緑のプリマスを古ぼけた車だと思っていましたが、この黒のフォードのトラックは50年代初頭の、骨董の部類に入る代物です。「今晚ビルとホームティーチングに行くなんて絶対……」とぼくは窓をまたにらみつけました。「ぼくのことをなんだと思っているんだ。迎えに来るのをただ座って待っているほど暇だとでも……。」

「ダニエル……」と母が止めました。「まだビルがどんな用で来ているのかもわからないじゃないの。」

「お母さん、もうパーティーが始まる時間なんだよ!」

「だったら、ビルにそう言いなさい。ほかに計画があるって。きっとわかってくれるはずよ。」

ぶつぶつ文句を言いながら、ぼくは凍りつくような寒さの中を半そでのまま黒のフォードのトラックまで小走りに歩いて行きます。ビルは助手席に身を乗り出してドアを開け、話そうとします。

「今晚約束がありましたっけ?」とぼくはビルが口を開く前に切り出します。そして、突き刺すような寒さに腕をさすり、足踏みしました。

「来週はもうクリスマスだから」と、ビルはあごの無精ひげをさすりながら簡単に説明します。「姉妹たちに少し持って行ってやりたいものがあるんだよ。一緒に来てくれないかと思ってね。」

「今晚ヤングアダルトのパーティーがあるんです。訪問の計画があると

知らなかったものですから。」

「時間は取らせないよ」とビルは言います。「だけどコートを着た方がいいな。」そしておかしそうに笑いました。「このぼろトラックにや大した暖房がついていないからな。だけど、プリマスの代わりにトラックにしなきゃならない訳があってね」と頭で荷台を指します。「ビビアン・レンチャー姉妹にちょっと特別な物を持って来たんだよ。」

ぼくはトラックの荷台に目をやりました。使い古したキャンバス地のシートの下には、何か大きな物が積み込まれています。

「パーティーに間に合うように戻って来よう。」まだためらっているぼくを見てビルは言葉を続けます。

「約束してたの?」と、コートを取りに行つて玄関のドアをたたきつけるように閉めたぼくに、母が尋ねます。

「そうじゃないけど……。」ぼくはため息交じりに答えました。「そんなことビルはおかまいなさ。ぼくはビルのあの黒いオンボロの中で凍えるんだ。暖房は効かないし、ぼく側のドアはちゃんと閉まらないんだ。いやになっちゃうよ! なんてよりよって今晚じゃなきゃならないのさ!」

バラード姉妹の家まで車を走らせながら、ぼくたちはひと言も口を利きません。思ったとおりぼくは凍えました。

バラード姉妹の家に着くと、ビルは運転席の下から茶色の紙袋を取り出し、ぼくたちは玄関に向かって歩き出しま



した。ぼくが1度ノックしただけで、バラード姉妹はすぐにドアを開けてこちらをまじまじと見詰めます。ちょっと間が開いて姉妹が訪問者を認めると、ほほえみが顔じゅうに広がり、姉妹は防風扉を開けて陽気にあいさつをしました。「今晚来るんじゃないかしらと
思っていたところよ。どうぞお入りになって。」

ぼくたちふたりは手編みのカバーが掛かった古ぼけたソファの、いつもの場所に腰を掛けました。バラード姉妹が目の前のいすに落ち着く前に、ビルは持って来た紙袋を差し出してぶっきらぼうに言います。「くるみ。うちの木の。」

「まあ、ありがとう、ビル。去年の分は感謝祭の時に使ってしまったのよ。1年じゅう大事にしているのよ。新鮮なままで取っておけるように冷凍庫に入れてるの。」

「殻を取ってきれいにしてあるから」と、ビルはゴツゴツした荒れた手を見下ろしながら付け足します。ビルが手をさすった時、ガサガサという音が聞こえました。ぼくはその手をじっと見ながら、先月の訪問で自分が述べた知恵の言葉のメッセージを思い出していました。その月の大管長会メッセージの中で知恵の言葉に関するものはほんの一部にすぎなかったのに、ぼくはその部分を取り出してかなり強調しました。そのメッセージはぼくにも姉妹たちにもあまり必要のないものでした。実際、ビルの悪癖を批判した残酷な仕打ち以外の何物でもなかったのです。

「まあ、ビル」と、バラード姉妹の喜びの音がぼくの注意をプレゼントに

引き戻します。「殻なしのくるみが2キロ以上もあるじゃないの。」

ビルは、はにかんだように肩をすくめ、鼻の先を引っ張ります。

「これだけするには何時間もかかったでしょう」と姉妹は言います。「本当にありがとう。」

ビルは称賛や褒め言葉をどう受け止めたらいかがかわからない人です。少しでも人に注目されるとどうにも意識過剰で神経質になり、言葉が出なくなってしまうのです。唯一その場面から逃れる手段は、注意をほかに向けるしかありません。そこで、ビルは赤いハンカチを取り出して鼻をかむと、「この子がクリスマスのメッセージを伝えます」と言って、ぼくを驚かせます。

ぼくはビルを見て、目を見張りましたが、ビルはズボンで手をふきながら右足でトントンと床をたたいています。抗議をしたかと思いましたが、この時点での抗議はもはや何の効果もないことは明らかです。こういうふうは何の

準備もない状態では、クリスマス物語以外に適当なものはないように思えます。

部分的に忘れてたり混同したりしながら、しどろもどろにイエスの誕生の物語を話し終えると、ぼくは恥ずかしさのあまり耳や首まで真っ赤にしてうなだれました。ビルは立ち上がりて言います。「えらくすばらしいクリスマスのメッセージだったよ。」それからせきをして付け加えます。「帰る前にこの子が祈りをします。」

バラード姉妹はうなずいて同意し、ぼくが祈りを捧げました。帰り際、ビルはバラード姉妹のまきストーブの前で何かを思い出したように立ち止まると、姉妹の方を振り返って尋ねます。「あの執事の子たちはまきを配達しに来たんでしょね。」姉妹はほほえんでうなずきました。「ちゃんと割ってあったんですね」とビルはまた尋ねます。

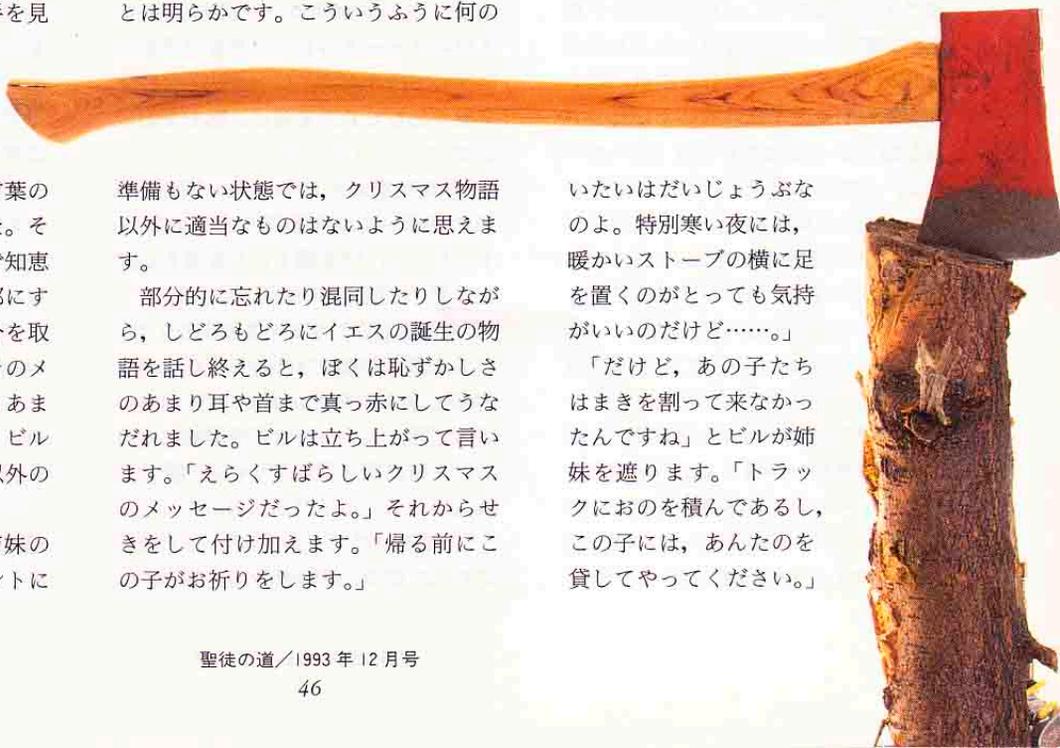
バラード姉妹はためらいがちに答えました。「それは自分でできるからだいじょうぶよ。」

「それじゃ割って持って来たんじゃないんだ」と、ビルはまるで怒ったように叫びました。

「ビル、気にしないでちょうだい。私はだいじょうぶだから。それにあまりストーブを使うこともないのよ。クラーク監督はいつも、ストーブじゃなくてセントラルヒーティングのスイッチを入れなさいって言っているし。だ

いたいはだいじょうぶなのよ。特別寒い夜には、暖かいストーブの横に足を置くのがとっても気持ちがいいのだけど……。」

「だけど、あの子たちはまきを割って来なかったんですね」とビルが姉妹を遮ります。「トラックにおのを積んであるし、この子には、あんたのを貸してやってください。」





ビルが本当にまきを割ってやると言っているのが信じられません。それも今晚です！ ぼくはよそ行きの服を着ていましたし、まきを割っていたら皆はトレイシーの家からキャロリングに出かけてしまうに違いないはずです。しかし、ビルはとっくにトラックに向かって歩きだしています。

そして数分後、ぼくたちふたりはバラード姉妹の裏庭で、ペランダの黄色い電球が放つ薄暗い明かりの中でまき割りをしていたのです。

「くるみなんか1袋持って来たって何になる」と、おのを怒り狂ったように振りながらビルはつぶやきました。「くるみじゃ暖まるわけにいかないじゃないか。おれが忘れたのが悪いんだ。ふだんは忘れやしないんだけどな。いつもはちゃんと確かめるんだよ。何か欠けている気がしてたんだけど、それが何かわからなかったんだ。そしたらあの冷たいままのストーブが目に入ったのさ。いつもだったらバラード姉妹は少し火をたいておくんだ。大した望みじゃないだろう。夫に先立たれたあの姉妹たちには、面倒を見てやる人が必要なんだよ。くるみの袋と、天使と羊飼いとかいばおけの話も悪くはないけど、寒い晩にはマーサ・バラード姉妹はまきを燃やしたいんだよ。」

ぼくはまきを割る手を止めてビルを見詰めました。自分のよそ行きの服も、かじかんだ手もぬれた足も忘れていきます。そして一瞬、ひび割れてガサガサの、油染みのある手の向こうにいるビルを改めて見詰めたのです。再びおのを振りかざした時には、キャロリングパーティーがひどく無意味なもののように思えてきました。

30分後、まきは全部割られ、裏口の横に積み上げられました。帰る前にビルはバラード姉妹にくぎをさしています。「自分でまきを割ろうなんて二度と考えるんじゃないよ。代わりにやってあげられる人が、しなきゃいけない人がいるんだからね。」

それから私たちはハッチ姉妹の家へ車を走らせます。玄関のベルが1度鳴っただけで姉妹はまるで待っていたようにドアを開け、うれしそうに笑顔を見せました。姉妹はぼくの腕を取ると中に引き入れます。「きょうがその日に違くないと思っていたのよ」と、姉妹は笑いながらビルの手を元気に握りしめ、居間に招き入れます。「だからホットココアとフルーツケーキを用意しておいたの。」

「これをどうぞ」と、ビルはまたくるみの袋を差し出します。

「まあ、ビル」と、袋を受け取りながら姉妹は息を飲み、そっと開けると中をのぞきました。「あなたっていつも覚えていてくれるのね、ビル。」

ビルはまた居心地の悪さを感じだしたようで、ぼくの方を親指で指してかすれ声で言います。「この子がクリスマスのメッセージをお伝えしますよ。今晚はそれで帰らせてもらいます。この子がパーティーに行かなきゃならぬものでね。」

最後の訪問場所はレンチャー姉妹の家です。ぼくがノックする間もなくドアが開き、レンチャー姉妹が金属製の歩行器にすがりながら満面の笑顔で出迎え、中に招き入れてくれました。ビルはここでもくるみの「儀式」を繰り返します。ビルと姉妹は天気や、姉妹の生まれたばかりのひ孫のこと、町の

道路事情の悪さなどについて話していました。ぼくはといえば、ビルに指名される時のために、頭の中で急いでクリスマスの物語をおさらいしていたのです。

突然ビルは立ち上がり、床を見ながらこう言います。「ほかにもプレゼントがあるんだよ。」そしてぼくの方を向いて言います。「手伝ってくれるかい。ドアを開けていてくれると助かるんだが。」

ビルはトラックに行くとキャンパス地のシートをめくって、いすらしいものを荷台から玄関前の階段の上まで引きずって運び、よろめきながら抱えて家に入って来ます。それは非常に大きい、完璧な作りの磨き込まれたかしの木の揺りいすでした。ビルは揺りいすをそっと部屋の真ん中に置くと、一步下がって誇らしげにほほえみます。レンチャー姉妹はただじっと見詰めるだけで、口も利けない様子です。まずいすを、それからビルに目をやって、最後にまたいすを見詰めました。

「春に前のが壊れた時、新しいのを作ってやろうって決めたんだよ」とビルは恥ずかしげに説明します。「父が大工だったから、昔はよく作ったもんだよ。これは壊れないと思うよ。既製品とは違うからね。」

ビルの話はそれだけです。顔から笑みが消えて、言葉が出なくなり、ビルはソファのぼくのわきに座り込みました。

レンチャー姉妹はゆっくりと立ち上がり、揺りいすまでそっと歩いて行きます。そしてその滑らかで、固い、光沢のある表面を指の先で触りました。高い背もたれを押すといすはリズムカルに揺れだします。姉妹はそのか弱い体をいすにそっと下ろし、白髪の手をがっしりした背もたれにゆだねます。一瞬レンチャー姉妹はじっと座っていました。それから、ゆっくりといすを前後に揺らだします。揺らしているうちに唇に笑みが浮かび、大粒の透き通った涙が目からあふれました。「ありがとう、ビル」と姉妹はささやきます。「ああ、なんて前のいすが恋しかったことでしょう。でも、」と、姉妹は緩やかにしなったひじかけに触れながら言います。「これは前のいすよりもはるかにすばらしいわ。」

ビルはせき込み、急にこう言います。「この子が、ちょっとしたクリスマスのメッセージを伝えます。」

「その前にお祈りしましょう」と、レンチャー姉妹が提案しました。

「この子はお祈りもできるよ」と、ビルは言います。

「今晚は私が祈るわ、ビル」と、レンチャー姉妹が静かに言います。

ぼくたち3人は頭を下げました。姉妹の祈りが進むうちに、ぼくはビル・ヘイワード兄弟がなぜいつまでもホームティーチャーの職から解任されないのか、理解したのです。

「それに天のお父様」と、レンチャー姉妹の祈りが続きます。「心の底か

らビルとビルの親切に感謝します。ビルが幾度となく雪かきをし、落ち葉を掃き、庭を耕して雑草を引き抜き、私の必要のすべてに心を配ってくれることを、あなた様に感謝します。ビルはまことにあなた様の助け手として働いてくれました。ああ、天のお父様、どうぞこの偉大な人を祝福し、お守りください。」

「アーメン」と言い終わるやいなや、ビルは神経質に振り返って、どもりながらこう言います。「この子がすばらしいメッセージを準備してあります。」

一瞬ぼくは口が利けませんでした。ぼくは感動のあまり、まるでこぶし大の塊がのどに詰まったようになっていましたが、口が利けないのはそのためではありません。頭の中が真っ白になったのです。自分ではかなり聖典に精通していたつもりでした。特にビル・ヘイワード兄弟のような人に比べればなおさらです。そのぼくがまったく何も、クリスマスの物語さえ思い出せないのです。少なくともこの時は話すことができなかったのです。代わりに頭に浮かんだのは奇妙なたとえ話です。それも、クリスマスとは何の関係もない、とこの時は思いました。

ぼくは唇をかみ、ズボンに手をこすります。「クリスマスがぼくにどういう意味を持っているか、お話ししたいと思っています」と、ぼくはつかえながら、ためらいがちに切り出しました。「少なくとも今晚、どういう意味を持っているかを、お話しします。」そう言って自分の両手を見下ろしました。

手はきれいでした。つめは切ってあり、手のひらにはたこひとつありません。「ふたりの人がある日神殿に祈り

に出かけました。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人でした」とぼくが話し始めます。「パリサイ人は清潔で教育があり、自分を賢いと思っていました。一方取税人は労働者で、その手は汚れていて、たごだらけでした。神殿に祈りに出かけたふたりのうち、パリサイ人は……。」(ルカ18:10-14参照)

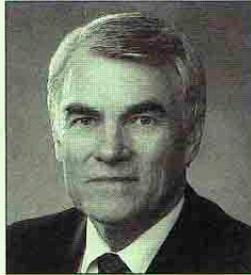
ぼくを家まで送って来ると、ビルはハンドルをつかんで突き刺すようにまぶしいヘッドライトの先の暗やみをじっと見詰めています。そして、「えらくすばらしいメッセージだったよ」とぼくに声をかけました。「だけど、ピアノ・レンチャー姉妹の所で話したようなクリスマスの話は、今まで聞いたことがないような気がするんだが。ほら、あの神殿に出かけたふたりの話だよ。」

ここで間をおいて、また言います。「あの話の意味がどうもよくわからないんだ。まあ聖典よりもディーゼルエンジンの方を勉強する男には、よくあることかもしれないが。」

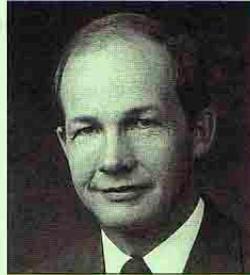
「だけど、あなたは聖典をよく知っていると思いますよ、ビル。」ぼくは静かに答えます。そして彼の方を向いて手を差し伸べます。前にもビルと握手はしましたが、自分から握手を求めたのはこれが初めてです。「ありがとう、ビル。」ぼくは感動からかすれそうな声で言いました。「ビル、メッセージをありがとう」と、彼の荒れた手を握りながらこう続けました。「えらくすばらしいメッセージでした。」□

教会幹部の管理上の異動

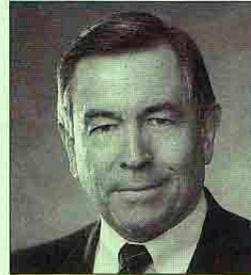
七十人会長会会員



ジョー・J・クリステンセン長老



モンティ・J・ブラフ長老



W・ユージン・ハンセン長老

中央若い男性第二副会長

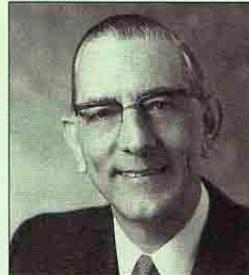


ボーン・J・フェザーストン長老

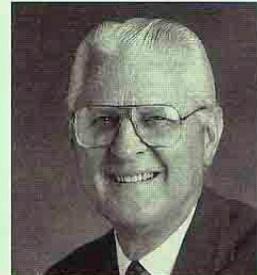
名誉教会幹部



アドニー・Y・小松長老



ヤコブ・ディヤガー長老



H・パーク・ピーターソン長老

10月2, 3の両日, 第163回半期総大会が開かれた。今大会では, 新たに3人の教会幹部が七十人会長会の一員として支持され, 3人の七十人第一定員会会員が名誉会員に任命された。(今大会および, 9月25日に開かれた女性の部会の説教とその模様は, 1994年1月号に掲載の予定)

大管長会はまた, 七十人第一定員会のボーン・J・フェザーストン長老が中央若い男性会長会第二副会長に召されたことを発表した。L・ライオネル・ケンドリック長老の後任となったフェザーストン長老は, これまでフィリピン・ミクロネシア地域会長会会長として働いてきた。ケンドリック長老は現在, テキサス州ダラス神殿の神殿長を務めている。

新たに七十人会長会の一員となったのは, ジョー・J・クリステンセン長老, モンティ・J・ブラフ長老, W・

ユージン・ハンセン長老の3人である。彼らは, 現ヨーロッパ・地中海地域会長会会長のディーン・L・ラーセン長老, 現北アメリカ中央地域会長会会長のジェームズ・M・パラモア長老, 現アフリカ地域会長会会長のJ・リチャード・クラーク長老の後任である。

元教会教育部副理事長のクリステンセン長老(64歳)は, 1989年4月に七十人第一定員会会員となった。これまで地域会長, 伝道部長, 中央若い男性会長会副会長を歴任している。

ブラフ長老(54歳)は, 1988年10月に七十人に召された。監督, 伝道部長, 地区代表, 地域会長会会長, 若い男性中央管理会会員などを歴任している。

ハンセン長老(65歳)は, 1989年4月に七十人第一定員会会員となった。これまで, 監督, スターキ部長, 地域会長会会長を歴任している。

今大会で名誉会員に任命されたのは,

アドニー・Y・小松長老, ヤコブ・ディヤガー長老, H・パーク・ピーターソン長老である。

小松長老(70歳)は, 1975年に十二使徒定員会補助に召され, 翌1976年10月には, 七十人第一定員会に召された。監督, 地区代表, 神殿長を歴任し, 地域会長会の一員にも幾度か召されている。

ディヤガー長老(70歳)は, 1976年に七十人第一定員会に召された。これまで副伝道部長, 地区代表などの責任を務めた。いくつかの地域の地域会長会でも働いた。

ピーターソン長老(70歳)は, 1972年に管理監督会第一副監督に召され, 教会幹部となった。1985年には七十人第一定員会会員として支持され, 地域会長会での召しを幾度か受け, 神殿長としても働いた。□

モンソン副管長, 国際的なスカウトの章を 授与される



PHOTO BY DON GRAYSTON

10月2日、総大会神権部会の席上でブロンズウルフ章を授与されるトーマス・S・モンソン第二副管長

国際的なボーイスカウト活動において最高の栄誉とされるブロンズウルフ章が、10月2日、第163回半期総大会神権部会の席上、トーマス・S・モンソン第二副管長に授与された。

現在、ボーイスカウトアメリカ連盟全国委員会の理事を務めるモンソン副管長は、長年にわたって精力的にスカウト活動に携わってきており、合衆国のスカウト活動で最高の栄誉、シルバーバッファロー章もすでに授賞している。

世界スカウト機構役員からブロンズウルフ章を受けるに当たって、モンソン副管長は、「さまざまな言語、人種、文化を背景とする若人の生活にスカウト活動が及ぼす、好ましい影響力」のために、長年にわたって教会が行なってきた支援について語った。

そしてこう付け加えた。「世界中の若人に、スカウト活動が及ぼす影響力が行きわたるよう、私たちは取り組んでいるのです。」□

教会が寄付をした14.5トンにもおよぶ衣類や靴が、ロシアのサンクトペテルブルグの人々の元に届けられることになった。

地方部長のピャチェスラフ・I・エフィモフ兄弟によれば、これらの衣類や靴はサンクトペテルブルグにある10の支部、およびボルグにあるふたつの支部に、必要に応じて配給されることになる、とのことである。

エフィモフ兄弟はこう説明している。「さらに、政府関係者を通して、病人や子供のいる家族や高齢者など、助けを必要としている個人や家族を探し出すつもりです。」

そして、セーター、帽子、上着、コート、手袋など、サイズ別に仕分けられ、50キログラムごとに梱包された冬

クリスマス

クリスマスの時期にあって、さらに救い主に思いを向けるにはどうすればよいでしょう。いくつか提案を試してみたいと思います。

●ルカによる福音書第2章など、聖典に記されたクリスマスのお話を読む。

●食事の祈りはもちろん、個人でも、家族でも祈る。祈りを通してクリスマスの意義を理解できるよう願い求めるなら、主のみたまがすみやかにあなたの心の目を開いてくれるでしょう。祈りを捧げる人にとって、主は身近な存在なのです。

●キリスト降誕の劇を行なう。演じる中で子供たちは、クリスマスの本当の意味を理解するようになるでしょう。

●奉仕活動を行なう。助けを必要としている人々のための養護施設にクリスマスプレゼントを届けたり、療養施設でクリスマスキャロルを歌ったりしてはどうでしょう。以下の聖句を思い起こしてください「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにした

ロシアを支援する

用衣類は、教会員や各地で働いている宣教師の手によって配給される、と語った。

教会国際福祉・救援活動ディレクターのアイザック・C・ファーガソン兄弟によると、今回のサンクトペテルブルグへの救援物資送付は、教会が現在実施している、助けを必要としている人々を支援する活動の一環として行なわれたとのことである。

ファーガソン兄弟は、またこのようにつけ加えた。「近年教会は、教会運営の『デゼルト産業』内に分類センターを設けて、各店舗からの余剰品を集めてきました。そこに集められた衣類は、実質的にすべて慈善事業のために各地へ送られています。」

1992年は、2,700トンを上回る物資

が、アジア、アフリカ、南アメリカ、東ヨーロッパの55カ国に送られた。ファーガソン兄弟は、1993年も2,700トン以上の物資を寄贈できるであろう、と述べている。

「教会は、民間の団体とも広く協力し合い、世界じゅうで救援・開発活動に当たっています。教会はこのたびのような救援物資の供給も、仁愛の精神で貢献する方法のひとつと考えているのです。」

衣類や靴に加えて教会は、医療機器や医薬品、教育資材も支給している。場合によっては、食料品も教会の倉庫から世界じゅうの危機にひんした状況にある地域へ送られる、ということである。（「チャーチニュース」1993年9月4日付）



PHOTO BY MARY KAY STOUT

助けを必要としている人々の元に届けるため、衣類を仕分けするタチアナ・アキモバ姉妹。彼女はサンクトペテルブルグのネフスキー支部で福音の教義クラス教師を務めている。

—救い主に一層心を向けるとき

のは、すなわち、わたしにしたのである。」（マタイ25：40）

●家族とともに時間を過ごす。家にいる時間がなくなるほど、忙しく働き過ぎないようにしてください。心に留めていただきたいと思います。仕事を仕上げるべきときもあれば、雪だるまを作り上げるべきときもあるのです。家族とともに時間を過ごすなら、家族は永遠であることや、それがイエス・キリストを通して可能となることを思い起こせるでしょう。もしあなたが働き過ぎて疲れ、不機嫌そうにしていたなら、子供たちはクリスマスを楽しんだときだとも、救い主を思い起こすときだとも思わなくなってしまうでしょう。テネシー州ナッシュビル伝道部
シェリル・ロビンソン（姉妹宣教師）

救い主に思いを向ける

私たちは、クリスマスにはキリストを思い起こすことがいばん大切であ

ると考えています。そのためにも、地域やワード部の中で人目につかないような奉仕をたくさん行なうようしています。家を飾るときは、幼な子キリストを強調するようになっています。今までいろいろな飾り付けをしましたが、その中でもいちばんよかったのは、赤ちゃんの人形を毛布でくるんで、バスケットの中に入れ、それをクリスマス・ツリーの下に置いた時でした。ツリーを見て、幼な子イエスを表わした人形が目に入るたびに、本来クリスマスに心を向けるべき事柄を思い出すことができました。

クリスマスには、特別な家庭の夕べも開きます。その際、ひそかにスポットライトを当てる家族を選びます。次にお菓子を作ったり、あまり高価でないプレゼントや、手作りの贈り物、時には自作の詩を用意します。そして、それらの贈り物を、選んだ家族の玄関先に置き、ベルを鳴らして走り去るのです。

救い主は私たちに、主の代理人として人々の必要を満たすように望んでいらっしゃるのではないのでしょうか。私たちがこのようなことをしてきたのは、そのためなのです。子供たちも喜んで参加しています。それは、「人々を心から思いやることはキリストの特質である」と子供たちに思い起こさせる機会ともなっています。

イディアナ州インディアナポリス
デビー・チャップマン

贈り物をする理由

数年前からキリスト降誕の場面に登場する人形を集め始めました。そのうち6個くらいはしまわずに、1年中飾っています。キリストのことをいつも心に留めるためです。子供たちの相手をするときには、贈り物をする理由を教えています。博士たちが幼な子イエスに贈り物をしたことを再現しているのだ、と。

クリスマスの時期、キリストに心を向ける方法はまだあります。キリスト降誕の場面の人形をばらばらに置いて

おき、子供たち一人一人に羊飼いを、博士、または羊の人形を馬小屋に並べさせるのです。その際、それぞれの人形が伝えていることの大切さを説明します。たとえば子供が羊飼いを馬小屋に置くときには、聖書から羊飼いについて読んで聞かせています。

バージニア州リッチモンド
シンディー・ヘス

家族の恒例行事

私たち家族が教会に入って最初のクリスマスに始めたことがあります。それは、クリスマスの時期、救い主に心を向けるのに役立つ、今では家族の恒例行事となっています。

クリスマスの朝食の後、「クリスマスの家庭の朝」を開くのです。月曜日の夜に開く家庭の夕べを通して、ひととき世を離れて福音に心を向けられるように、「クリスマスの家庭の朝」を通して商業化されたクリスマスから離れ、救い主に心を向けることができます。

「クリスマスの家庭の朝」では、クリスマス・キャロルを歌い、祈り、聖典から救い主降誕の話を読み、教会の出版物からクリスマスにふさわしい記事を読みます。この活動を通して、皆がクリスマスにキリストを思い起こせるのです。

イギリス、クローリー
ピーター・J・セルビー

人々を助ける

これまでの10年間、私たち家族が、努力して、大いに成功してきたことがあります。家の飾りつけやプレゼントの購入、支払い、ラッピングまで、すべて12月1日までに終わらせるのです。おかげでストレスが軽減され、クリスマスの真の精神を感じられる平穏な雰囲気が生まれます。そしてキリストの誕生と生涯について思いをめぐらし、主に一層仕えるために何ができるか考えられるのです。

また、霊的な活動に専念する時間がより多く持てます。たとえばロサンゼルス神殿の訪問者センターで行なわれ



PHOTOGRAPH BY JED A. CLARK

るクリスマス・プログラムに出席したり、聖歌隊で歌ったり、人に力を貸したりできます。私たちの大好きな奉仕活動を紹介しましょう。隣人のひとりに対して行なう、「クリスマスの12日間」という活動です。毎日食べ物や愛情を込めたプレゼント、それに心を高められるような品物を隣人宅の玄関先にこっそり置いていき、12日目に私たち家族の写真と証を載せたモルモン経を1冊届けるのです。この活動を毎年行なうことで、隣人たちとの親睦が深まり、心の触れ合う穏やかな雰囲気が増したように思います。

カリフォルニア州ガーデナ、ウールワイン
ビッキー・リー・ジョンソン

かけがえのない時

11月のことでした。私たち家族は、その日からクリスマスまでの間に開く家庭の夕べを、救い主に捧げよう決心しました。もし家庭の夕べの焦点を救い主の教えに絞り、ともにその教えを学ぶなら、救い主への愛がさらに高まり家族全員が成長できる、と考えたからです。

最初のレッスンは、12歳のエミリーが行ないました。エミリーが選んだレッスンのテーマはラザロの蘇生という奇跡でした。レッスンによって私たちは救い主を身近に感じ、家族のきずなをより強めることができました。その日私たち家族全員は、本当にみたまを強く感じました。今後も私たち家族は、さらに救い主に近づいていきたいと思っています。そうすることで、このク

リスマスの時期が、かけがえのない時となると確信しています。

コネチカット州シムズベリー
パティ・ステュワート

霊的な祝祭

昨年、アリゾナ州フェニックス西ステーク部メリーベールワード部では、特別なクリスマスプログラムが催されました。会員たちは、ベツレヘムに見立てたワード部の文化ホールまで、「人口調査のための登録をする」という設定で旅をしたのです。それぞれの家族はキリストの時代の服をまとい、頭を覆い、ぞうりを履いてやって来ました。そして、入口で取税人の役を務める会員に名前を告げると、登録を済ませました。次に家族は、家長がリフレッシュメントを盛って家族の元に運んでくるまで、キルトなどの敷物の上に座って待つように言われました。(もちろん必要な人のためにいすも用意されました)

キリストの誕生を祝う夜に行なわれたこの霊的な祝祭は、実に素晴らしいものでした。子供たちの歌や劇があり、心に響くクリスマスの物語が朗読され、才能豊かな青年が「王の生まれたもう日」という歌を歌いました。伝道への出発を翌週に控えた別の青年は、閉会の歌として「聖なる夜」を、みたまに満たされながら、愛を込めて歌いました。皆の思いが一層キリストの降誕に向けられるとともに、喜びが満ちあふれ、多くの人のほおを涙がつかいました。

アリゾナ州フェニックス
エラ・メイ・ジャッド

まとめ

1. 聖典に記されたクリスマスの話を家族で読む。
2. 個人でも家族でも祈り、主のみたまを求める。
3. 救い主を中心にした家族の恒例行事を作る。
4. 奉仕活動を通して人々を助ける。(「チャーチニュース」1992年12月5日付)

18年目の祝福

—祝福師の祝福の中で

約束されている子供を待ち続けました—

仙台伝道部郡山地方部郡山支部 小室悦子

今改めて自分の人生を振り返ってみると、人生の半分以上を、末日聖徒として過ごしてきたことになり

ます。私が東京北青山にあった東京ワード部でバプテスマを受けたのは、1969年初冬のことでした。ほどなく、浦和ワード部へ移り、その浦和ワード部で現在の主人と知り合いました。当時、主人はまだ理工学部の大学生でしたが、教会のプログラムを通して、お付き合いをするようになり、お付き合いを通じて、主人からたくさんの手紙をもらいました。あるとき主人は手紙の中で自分の将来を語り、いつの日か自分が家庭を持ったときには、末日聖徒の音楽家族を作りたいと、書いていました。その1文はなぜかとても印象が強く、心に残りました。主人はギターを弾くことが好きで、機会がありますとよく皆さんの前で弾いていました。私はこれと言って楽器の演奏はできませんでしたが、私もその夢に参加してみたいと思ったものです。それが、私が主人との結婚を決意した理由のひとつでした。

主人が大学を卒業して間もなく、私たちは東京の第2ワード部(現在の中野ワード部)で結婚式を挙げました。しかし、私たちの思いとは裏腹に、1年たっても、2年たっても、音楽家族のメンバーは登場しませんでした。私は、大学病院をはじめたくさんの病院へ通い、心の底から何千回、何万回と数えきれないほど、子供を授けてくださるようにと祈り続けましたが、いっそうに変わりはありませんでした。やがて主人も私も信仰が薄くなり、心の飢えを感じずにはいられなくなりました。そのような中、主人の仕事の関係で、郡山へ引っ越すことになりました。心が飢えている状態から抜け出すこ

とは、なかなかむずかしく、私は「おぼれる者はわらをもつかむ」の心境で、必死に抜け出す方法を探しました。そんなある日、雑誌の中の1ページが目にとまりました。「イスラエル・聖地巡礼の旅。」その瞬間、私の脳裏に、「これだ」という衝撃が走り、反対する主人に頼み込む形で、初めての海外旅行に出かけたのです。4年ほど前のことでした。

その団体旅行には全国から10人の参加者がありましたが、知り合いはひとりもいませんでした。飛行機の中では話し合う相手もなく、少々寂しい思いをしましたが、現地に到着すると自分の旅の目的が正しいものであったと実感しました。

その旅も後半となったころ、ツアーのメンバーのひとりの若い女性の方が、ガリラヤ湖を渡る船上で、「私に神様のことを教えてください」と、話しかけてこられたのです。私は喜んで自分の乏しい知識の中から一生懸命、神様についてお話をさせていただきました。

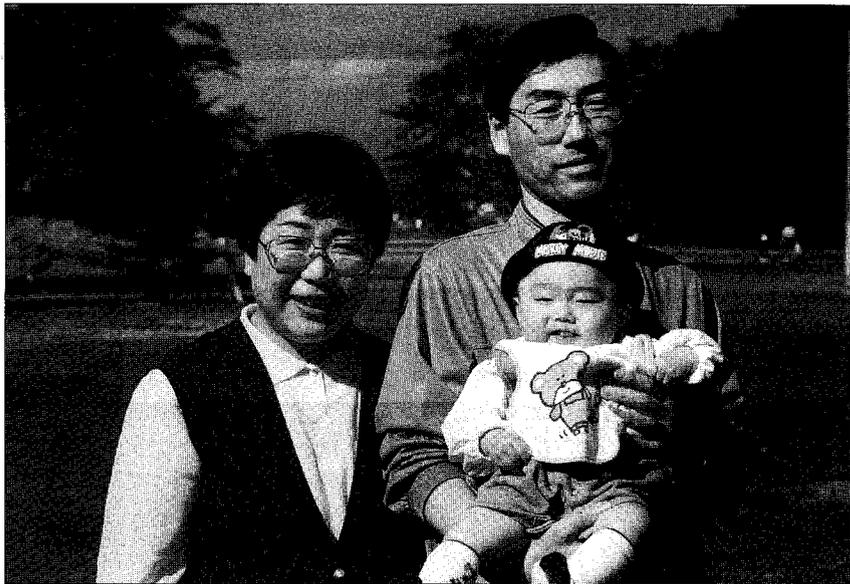
そして、帰国してから、その方との文通が始まり、あるとき私は、近くの末日聖徒イエス・キリスト教会をぜひ訪問するように、手紙の中でお勧めしました。

それから数カ月たったある日、その方から手紙が届き、大変驚きました。そこには、「バプテスマを受けることになりました」と書いてあったからです。バプテスマの当日、私は心から喜んで、東京ステークス部吉祥寺ワード部へと向かい、バプテスマ会に出席しました。

ところで、私たち夫婦の上には、だれもが考えてもみないようなことが、現実となって起こりました。今年3月30日、結婚18年目にして初めて、神様からひとりの元気な男の子を授かったのです。この日の来ることを、どんなに、どんなに待ち望んでいたことでしょうか。周囲の人たちは、私たちが結婚してからあまりにも長い年月がたっていたために、すっかりあきらめていました。しかし、私自身はあるとき、祝福師の祝福の中で約束されているのだから、あまり思い詰めずに、神のご意志にお任せしようという気持ちに変わってから、忘れずにずっと祈り続けていたのです。

出産は、帝王切開でした。手術中、出血多量で血圧の変動が激しく、関係者のかたがたははらはらしたそうです。しかしやがて、赤ん坊の元気な泣き声に続いて、病室で待機していた母が手

小室ご家族



夫の改宗

——予言者の言葉に導かれて——

東京西ステーション部国立ワード部 菅野一恵

術室の隣にある育児室に入り、子供に向かってしみじみと「よく生まれてきてくれたね」と、話しかける声が聞こえてくると、私はその声に励まされて、なんとか手術を無事に終えることができました。娘の長い間の思いを知っている母ならではの、ひと言でした。

その時、主人も母と一緒に我が子と対面していたのですが、感激で泣きたい気持ちを抑えるのに、精いっぱいだったそうです。出産した病院では、最高齢出産となり、病院の記録を更新したと、聞かされました。

あれから9カ月になろうとしています。主人も私も、いまだに現実とは思えず、ときどき、これは夢ではないかと、話し合うほどです。でも、我が子が神様のもとから私たちのところへ来るために、10カ月もかかって旅をしてきてくれたのかと思うと、いとおしさで胸がいっぱいになります。今年7月に仙台伝道部長を解任になった福田真^{まこと}、康子ご夫妻が郡山へいらっしゃった時、福田姉妹が我が子を抱いてくださり、やさしい声で「あなたは特別な子なのよ」と言ってくださった言葉が今でも忘れられません。

ひところ教会をお休みしていた主人も、今では地方部の幹部書記の責任をいただいています。どんなに仕事で疲れて帰ってきて、責任を果たすべく、夜遅くまで、また時には夜中までも起きて頑張っている姿に、心からの感謝をせずにはられません。

人生を少し遠回りしてしまったような気がするときもありますが、これも神様が私たちに何かを学び取るようにとお与えくださった試練^{たまもの}の賜^{たまもの}と思い直し、少々年を取った親ではありますが、子供とともに、成長していきたいと思っています。

神様が生きておられますことは、揺るがすことのできない事実です。私たちがひとつのことを願い求めるとき、すぐにはかなえられるときもあれば、長い間かかってかなえられることもあります。でもどんなに時間がかかっても、あきらめずに心から願い求めれば、必ずかなえられることを、私は身をもって証^{あかし}したいと思います。(こむろ・えつこ)

16歳の時私は改宗し、教会員生活を楽しんでおりました。そしていつか、末日聖徒の家庭を築くことを夢見ていました。ですから、伯母から見合いの話があった時も、会うだけですぐ断わるつもりでした。でも会ってみると、やさしくて、すてきな人だったので、教会の話をしたり、宣教師から福音を学んでもらったりしました。

「教会員になってほしい」という私の願いに対し、彼は「あなたと結婚するために教会に入ることはできない」と、きっぱり言います。私は悩みました。真剣に祈り、神の助けを願いました。祈り、しばらくすると、心の中が温かくなり、「何も心配はいらない」という感じがしました。あるときは、職場に向かう電車の中で突然「彼に福音を伝えなさい。彼は受け入れます」という声を聞いたように思いました。

私は決心し、結婚しました。いつかはきっと彼が福音に心を開くことを信じて。

しかし、何年たっても彼が改宗する気配はありません。宣教師が訪問してくれても、話をするだけで、福音の勉

強はやんわりと断わってしまいます。彼はサラリーマンをやめ、大学院に入り、税理士の資格を取りました。私と結婚した後、すぐに自宅で事務所を開きました。得意先も次々と増えていき、夫は税理士会の役員を引き受けたり、ロータリークラブや野球部の活動に熱中したりで、大変忙しくなっていました。

私はというと、さまざまな試練に耐えられず、次第に信仰を失い、教会にも行けない日々が長く続きました。しかし体調をくずし、やむを得ずへりくだるようになって、心がイエス様や神様の方に向くようになりました。そして1991年10月ごろから、子供たち3人と、再び楽しく教会に集えるようになりました。

1992年6月ごろ、夜ひとりで聖典を読んでいると、おかしなことに少しも聖句が心の中に入ってきてません。それで「聖徒の道」を読むことにすると、その月は神殿特集号でした。エズラ・タフト・ベンソン大管長の言葉に目が留まりました。

「神殿に参入して主の宮居にかかわ

1993年7月24日、東京神殿で結び固められた菅野ご家族と、儀式を執行した井上龍一兄弟(後列右)



る儀式を受けると、次のような確かな祝福が与えられます。

● エライジャのみたまを受け、それによって自分の伴侶、子供たち、先祖に心が向くようになります。

● 以前にも増して、家族への愛が深まります。……

● 主が約束されたように、『いと高きところより』力を授かります。(教義と聖約105:11参照) (『聖徒の道』1992年6月号, p.1)

私でもそのような祝福が受けられるとするならば、ぜひ神殿に参入したいと強く思いました。

それからほだれかに後ろからせきたてられているかのように、準備を進めていきました。1992年7月11日に自身自身のエンダウメントを受けることができました。同月19日には、長女奈々恵がバプテスマを受けました。夫は8歳の子供にバプテスマは早いのではないかといやな顔をしましたが、なんとか許してもらいました。

奈々恵のバプテスマの翌日、夫が「昨夜変な夢を見たよ。ぼくが白い衣を着て、電車に乗っていると、周りではおおぜいの人たちがぼくのことをじろじろ見るので、恥ずかしくなって、そのうち立川(国立ワード部は立川市にある)で電車を降りたんだ。」

私は冗談で、「そろそろあなたも教会に入るってことじゃないの」と笑って言いました。夫も「まさかね」と言って笑いました。

8月に入ると夫は突然胃の調子が悪くなり、入院することになりました。私と子供は安息日の集会後、見舞いに寄りました。夫はとても沈んだ様子でした。自分の今までの行動は間違っていたのだろうか、と何回も聞くのです。癌ではないかと疑っていたようです。受付のソファに腰を下ろして話していると、あるキリスト教会の年配の外国人の女性が突然話しかけてきました。夫の様子を見て重病だと思ったらしく、「ガンバッテ クダサイ。パパサンノ タメニ オイノリシマスカラ ナマエヲ カイテクダサイ」と、親切にパンフレットや、子供たちには本のしおりやタオルまでくださいました。その女性が帰ると、「こんなときにこそ、『聖

徒の道』か何かを持ってきてくれるといいんだよ」と夫が言うので、奈々恵のリュックサックに入っていたモルモン経を渡しました。夫は少し困った顔をして、「読むかどうか、わからない」と言いつつも、手に取って病室に帰りました。その夜、夫は病院から電話をかけてきました。そしてこう叫んだのです。「一恵。モルモン経ってすばらしいね。」

夫は1週間の入院中に読み終え、みるみる変わっていきました。宣教師からの福音の勉強も、楽しそうに毎週2回受け、みたまに満たされた時間を家族で過ごしました。

1992年10月25日、夫は45歳でバプテスマを受けました。結婚後10年が過ぎていました。

私は2、3年前、とてもつらい時に神様に祈り、不平をもらしました。だ

れも私の悲しみをわかってくれません。と。そのとき、みたまがこうささやくのを聞いたように思いました。「あなたの悲しみや苦しみが私がよく知っています。それでじゅうぶんではありませんか。」

賛美歌75番『主は生けりと知る』にあるとおり、主は確かに生きていらっしゃるのです。

1. 主は生けると知る そは幸を与う
死にし主は生きて
永遠に生きたもう
愛に恵みつつ 願ひ聞くために
また飢えたる霊を、
救わんと生きたもう
2. 主は生きて、恵み 導きをたもう
わが嘆き聞きて 弱きを慰む
わが恐れをとめ 涙ぬぐいたまい
心に喜びを与えて、生きたもう
(かんの・かずえ 初等協会教師)

「先祖の心に子らを思わせ、 子らの心に先祖を思わせん」

——先祖の語りかける声が聞こえました——

我孫子ステーキ部我孫子支部 大原光子



最初は不承不承に取りかかった家族歴史の探求および記録整理の作業でしたが、進行するにつれ目に見えない大きな力によって助けられ、3カ月足らずで100枚ほどの記録を提出することができました。6年前のことです。

私の傍系の先祖に、「影山トリ」という名前の明治時代の女性がいました。ある夜、彼女の戸籍を調べて驚きました。毎年のように11人も子供を生んで

いますが、5人目から10人目までの6人は、産まれて数時間、数日、数カ月で死亡しているのです。

私は当時、半年前に3人目の子供を出産しており、その余韻がまだ残っていました。隣の部屋では、6カ月と2歳、4歳の3人の子供たちがやすやすと眠っています。子供たちの頭をなでてやり、その温かな体温に触れると、無性に悲しくなりました。長い間おなかに温めて、やっとこの世に生まれたのもつかの間、腕の中で我が子がだんだん冷たくなっていくのを幾度も経験し、彼女はどんな思いだったのでしょうか。彼女のことを知りたいと思いましたが、資料は戸籍以外にありません。戸籍によると、トリさんは福島県で結婚し、間もなく北海道に開拓民として渡ったようです。

私は図書館で北海道開拓史の本を借

り、読みふけりました。その時ふと、この教会初期の開拓者たちを思い出しました。どこの国でも、どの時代でも、開拓という名のもとに、たくさんの無名の大人たち、子供たちが犠牲になってきました。そのような中であって末日聖徒の開拓者たちは、たとえこの世で苦難風雪のうちに死のうとも、来世で再び愛する家族と巡り会い、永遠に一緒に暮らせるのだという証^{あかし}と希望を持っていました。けれども、トリさんは福音をまったく知らなかったのです。

私は自分の子供たちの顔を目に浮かべながら、トリさんの子供たち一人一人の死亡年月日を写し取り、つぶやきました。「○○ちゃん、○○ちゃん、神殿で儀式を受けたら、お父さんとお母さんとずっと一緒にいられるのだからね。だっこしてもらったり、遊んでもらったり、この世でたくさんはしてもらえなかったけど、もっともっと愛してもらえるからね。待っているんだよ。」

子育てまっ最中で、同じ幼な子を持つ母親として感傷的になっていた私は、涙をぬぐって顔を上げた時、目を見張りました。目の前のカーテンに、おぼろげながら人の形が現れていたのです。私に似た、見知らぬ女性の上半身が、こちらに向かってゆっくり頭を下げ、消えていきました。

私は皆が寝静まった真夜中、もう何も見えなくなったカーテンに向かって心の中で叫びました。「トリさん、あなたはトリさんでしょう。必ず、必ず、あなたをご主人やかわいい子供たちに会わせてあげます。待っていてください。」

後で振り返った時、なぜトリさんだとすぐにわかったのか不思議でしたが、彼女の魂に触れたような熱い思いがしました。そしてトリさんの家族の記録を完成し、別の家族に移ろうとしたところ、突然、右手が麻痺したようになり、ペンを握れなくなりました。根を詰めて字を書き続けたので、腕が炎症を起こしたのかと思いました。でも、痛みはまったくないので。そのかわり心臓がどきどきして、あまりの苦しさに、「神様、なぜなのか教えてください」と祈りました。

トリさんの記録が何か間違っているのかもしれないと、また取り上げてながめると、長男の名前が大きく目に飛び込んできました。長男のKさんは5、6日前の戸籍によると、まだ健在です。「おかしい。どうしたのだろう。夜なべが続いているので疲れているのだ。さっき、思わずトリさんが現われたと思ったけれど、開拓史の本のさし絵の女性が幻覚となって見えただけなのかもしれない。もう寝た方が良い。」こう思った途端、細いながらもはっきりとした叫び声が心の中でこだまするのです。「急いで、早く。」「ああ、今度は幻覚だけでなく、幻聴まで起きてしまったのか。」ところがまた、「急いで」とせかされるのです。私の心臓は早鐘のようです。「私はKさんの現況を知らなくてはならない。夜が明けたら早速調べよう。」

翌朝、北海道の電話局で番号を尋ね、電話をしました。何度してもだれも出ません。夜になってやっとつながりました。「Kさんはご在宅ですか。」「私は嫁ですが、Kは人口呼吸器をつけていて、きょう明日の命です。私はたった今病院から戻り、親類に電話し、また出直すところなのです。」

早々に電話を切ると、私はへなへなと座り込んでしまいました。しばしばう然としていました。トリさんは知っていたのです。長男がもうすぐこの世を去り、霊界にやって来ることを。それを私に教えたかったのです。彼女が私に叫ばなかったら、私はトリさんの家族の記録は一件着落とばかり、熱しやすく冷めやすい私の性格からすれば、それ以降は何年もたたなければ新しい戸籍を取り寄せてもう一度調べ直すということはなかったかもしれません。

それから1カ月ほどいろいろ調べて、トリさんの身内に会うことができました。彼は私を見るなり、「おふくろによく似てなざる。福島^{しんせき}の親戚の顔立ちですね」と懐しそうに言いました。おふくろとは、トリさんのめいに当たる人です。あの日の真夜中、私に似た女性を見たのは、幻覚ではなく、本当だったのでしょうか。

記録の数が膨大だったせいだと思えますが、提出してから2年もたつてや

っと、儀式完了通知が届きました。200人近くのエンゲウメントや結び固めが行なわれたのです。ふ厚い記録を胸に抱き締めると、部屋の中にいるのに、突然視界が開けて海原が見え、海のどよめきが聞こえたような気がしました。あまたの先祖の霊の喜びの声が海鳴りのように、私の心に聞こえたのでしょうか。

私は考えました。200人もの先祖のために救いの儀式が行なえたにもかかわらず、もし私がそれをしていなかったとしたら、先祖はどれほど悲しむ^{めい}ことでしょうか。「子孫の中であなたが唯一^{めい}の末日聖徒で、私たちを救う手だてを知っていたのに、何もしてくれなかった。ずっと待ちこがれていたのに」と。

家族歴史活動は死者に対する伝道だと言われます。けれども、私にとっては、もはやそれだけのものではありません。それまで、どうしてこんなつらい思いをしてまで教会員として生活していくのか、と考えることがありました。でも系図がある程度一段落した時に、私はその答えを見いだしていました。「もうこの教会から離れることはできない。救いの計画や回復された真理、証など、もろもろの記憶をすべて消し去ることができない限り、あるいは今感じている証を否定することができない限り、雄々しい証人とはなり得なくとも私は教会員でいるしかない。」

この世の一見業に見える生活に飛び込めたら、と願うこともあった私にとって、それは悲壮な選択であると同時に、またどれほど自分がすばらしい祝福にあずかっているかを再確認するものとなりました。私が死者に伝道したのではなく、逆に霊界にいる先祖たちが私に福音を伝えてくださったのです。家族歴史記録の一連の作業を通じて、私の証はとて強くなりました。

「先祖の心に子らを思わせ、子らの心に先祖を思わせん。」(教義と聖約110:15)この聖句は真実です。神様が確かに生きていらっしゃる、真理が回復され、教会の使命の3つの局面を通してたくさんの祝福が得られることに感謝しています。(おおはら・みつこ初等協会教師)

みたまにより知る

——涙があふれ、
主がともにいてくださることを知りました——

岡山ステーキ部松江ワード部 大杉雅子

「なぜ私のような者が。」心の中はこの思いでいっぱいでした。というのは、今年4月17日に私は監督より面接を受け、「あなたを扶助協会の会長として召します」と言われたからです。私は「はい」と返事をしたものの、後になって事の重大さに気づき、不安と恐れに襲われました。「私などとてもふさわしくない。ほかの人の方がもっとふさわしいのではないか。」そこで次の日の安息日には必ず監督に会って、自分がふさわしいと思うほかの姉妹を推薦してきっぱりと断わろうと思いました。

ところが、いざその日になってみると監督は姿が見えず、いつも尊敬し、頼りにしている姉妹も病気のため来ていません。私は自分がまるで見捨てられたような暗い気持ちになりました。すべての集会が終わり家に帰ってから、お見舞いに行こうと思った私は、彼女の家に行きました。病気で休んでいるところを訪ねると悪いと思いましたが、彼女は逆に私をその温かい愛で包んで

励ましてくださいました。おかげで心の中の恐怖は半分ぐらい取り去られましたが、まだ完全にすっきりしたわけではありませんでした。

そんなある日、ふと扶助協会の次の週のレッスンを気になり見てみると、テーマは大会号の『証という霊のかがり火』（「聖徒の道」1993年1月号、pp.40-43）でした。確かに前にも読んだはずでしたが、改めて読むと、なんと今の自分に当てはまること書いてあるのだろう、と思いました。特に最後の部分にはこう書いてありました。「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、……わが勝利の右手をもって、あなたをささえる。」（イザヤ41:10）

この聖句を読んだ時、涙があふれ出てきました。「主よこれ以上のみ言葉があるでしょうか。私はなんと愚かだったのでしょうか。あなたが私とともにいてくださるのなら、何を恐れること

があるでしょうか。」それまでの恐怖はすべて取り去られ、頑張ろうと決意しました。

4月に召されて3カ月、主は何度となく、扶助協会で学んだみ言葉により励ましを与えてくださいました。

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。……」（マタイ11:28-30参照）「汝ら大いに元気を出して怖ることなかれ、そは主なるわれ汝らと共に在りて汝らを護ればなり。」（教義と聖約68:5-6参照）

これらの言葉が心の奥にしみわたると同時に、天父が私たち一人一人を愛してくださり、勇気づけるためにもこのようなすばらしい聖典を与えてくださったことに、私は心から感謝しました。

また梅雨の合間のよく晴れた日に、長男の啓悟を幼稚園に連れて行く途中に空を仰いで思いました。「きょうはなんと美しい日だろうか。緑もひときわ映えて、なんときれいでさわやかだろう。」賛美歌44番の『わが主よ、わが神』を歌いかけたところ、突然私の胸に静かに、しかしはっきりと、「元気をしなさい」と聞こえ、涙があふれ出てきました。心が喜びでいっぱいになりました。

同じ日の11時過ぎごろ、ベランダで洗濯物を干していると、太陽の周りにきれいな虹の輪ができていて、その内側にはまるでフィルターがかかったように薄い雲がたなびき、神秘さを一層かもしだしていました。「驚き、たたく日あり 主のみ手なせる業に 星影、いかずちもみな あまねく、汝れを証す。」（賛美歌44番）この歌詞のように、万物を創造された主の偉大さを思い知らされ、何度も何度もこの賛美歌を歌いました。

主は、いつも私に賛美歌をもって私自身の証を確固たるものにしてくださいます。

5年ほど前、主人と改宗して1年ぐらいたったある日、私は『主イエスの愛に』（賛美歌109番）を歌いながら、洗濯物を干していました。そのころ私は、「主は確かに生きていらっしゃる」という証を聞いても、実感がわ

大杉ご家族



かず、主が生きていらっしゃるとはどのようなことだろうと考えていました。ところがその日、私の心の中にひとつの聖句が浮かんできました。「見よ、聖文が汝の目の前にあるばかりでなく、万物は神のあることを示している。大地もその表面にある万物も、大地の運動も、各々秩序正しくその軌道を運行する天体も、みなことごとく全能全権の創り主があることを証明している。」(アルマ30：44)それから山や川、花などを見回すと胸に温かい気持ちを感じ、主は確かに生きていらっしゃるとわかったのです。それと同時に、ジョセフ・スミスのようにその場にひざまずいて祈りたい気持ちがわき起こりました。

私は松江ワード部の人々に心から感謝しています。一つ一つ数えあげれば

きりがないほど、たくさんの愛を示してくださいました。また、3人の子供たちと、良い父親であり、神権者である主人にも心から感謝しています。わがままな私を、主人は受け入れ、よく助けてくれます。私がこの世で神様からいただいているものには最も価値があります。本当に失いたくない永遠の友や家族を心から愛しています。私は天父が与えてくださったすべてのものに感謝しています。

確かに天父と御子がジョセフ・スミスを通してこの真理を回復されたこと、聖典は私たちを一步一步完成へと導いてくれる神様のみ言葉であること、主が確かに生きていらっしゃり、末日聖徒イエス・キリスト教会が神様の真実の教会であることを証します。(おおすぎ・まさこ ワード部扶助協会会長)

の物語を通じて、息子もイエス・キリストに強い関心を示すようになりました。

息子が1歳半になり、託児のクラスに入った時のことです。あらかじめ教師の姉妹からクラスで歌う曲名のリストをいただき、毎回家庭の夕べでそれらの曲を英語で歌いました。そのおかげで、初めのうち託児の教師が英語で教えるレッスンにとまどっていた息子も、音楽によってクラスになじめるようになりました。さらに、神殿、モルモン経、宣教師についても、子供の歌を繰り返し歌うことによって、その大切さや意味を理解し始めています。最近では、毎回息子が短いレッスンをしてくれます。こうして音楽を通して子供とともに福音を学ぶ機会を持つことは、私たち両親にとって大きな祝福です。

3つ目として、柔軟性をもって家庭の夕べを行なってきたことです。結婚した当時は、曜日やプログラムなど、家庭の夕べはこうあるべきだというパターンにとらわれていました。その結果、次第にその義務感が重荷となり、しばらく家庭の夕べを行なわない時期もありました。しかし、10カ月の息子が参加するようになってからは、短い時間でも家庭の夕べを楽しめるものにしていこうという思いにかかりました。

まず、月曜日に必ず行なわなくてはいけないという硬い考えを捨てました。曜日にこだわらず、できる日に無理のない時間帯で行なっていくことにしたのです。その当時、ブリガム・ヤング大学の学生だった主人の都合で、私たちは家庭の夕べを毎週日曜日の夕食後に行ないました。時折、日曜日に行なわれるファイヤサイドなどに参加して家庭の夕べができない週には火曜日に変えたり、私たちが準備したレッスンや活動が息子の興味を引かないときには、その場でテーマを変え、息子のお気に入りの活動(歴代大管長カードゲーム、予言者サムエルやモルモン経とリーハイがかかれた子供用イラストを厚紙に張って作った自家製のジグソーパズルなど)を行なって、和やかな雰囲気を作ったりといった具合に、とにかくリラックスして行なってきました。

こうして続けてきた結果、今では4

我が家の「家庭の夕べ」

息子は我が家の常任指揮者

——楽しい「家庭の夕べ」のための3つのアイデア——

ユタ州プロボ・ボネビルステーキ部ボネビル第2ワード部 岸 愛子

私たちの5回目の結婚記念日から1カ月ほど過ぎた今年7月12日、我が家で200回目の「家庭の夕べ」を迎えました。結婚して間もなく主人の勉強のために渡米し、以来ずっとユタ州で生活していますが、この5年を振り返って、私たちの家庭の夕べを楽しめるものにしてくれた3つのアイデアをご紹介します。

ひとつ目は、記録をつけたことです。私たちが結婚してすぐに立てた目標は、毎週家庭の夕べを行なうこと、また、家庭の夕べのノートを作り、家族の記録を作ることでした。毎回、開会・閉会の賛美歌とお祈り、レッスンや活動の内容、1週間のスケジュールなどを記録しました。時折主人とふたりでそのノートを読み返しますが、そのたびに、それまでの経験からさらに良い家庭の夕べを開くための改善策を得たり、その時々思い出を話し合ったりして、楽しいひとときを過ごすことができま

した。何よりもこの記録がなければ、私たちの家庭の夕べが200回目を迎えたことを知らずにいたでしょう。

ふたつ目は、家庭の夕べに音楽を豊富に取り入れたことです。私たち夫婦の共通の趣味は音楽です。長男が10カ月の時初めて家庭の夕べに加わり、それ以来親子3人で家庭の夕べが続いていますが、息子も大の音楽好きで、賛美歌を歌うと自然に指揮をするようになりました。そんな息子も4歳になり、いまだに我が家の常任指揮者を務めています。さらに、息子がある日自分で作った短い歌詞にメロディーをつけて歌っていた曲に、主人がギターで伴奏をつけ、我が家の家庭のテーマソング「家族は楽しいな」を皆で歌ったこともありました。またレッスンの際に、新約聖書をテーマにしたアニメーションのミュージック・ビデオをときどき使います。きれいなメロディーとアニメーションによって写し出された聖書



200回目の家庭の夕べをする岸ご家族

歳の息子が家庭の夕べを一番楽しみにするようになってきました。夕食後など、息子が疲れて眠そうにしているも、「家庭の夕べをしよう」と声をかけると、息子は眠気などこへやら、みず

からテーブルを用意し、モルモン経、賛美歌、伴奏用のギターなどを出し、指揮棒(鉛筆)を持って来ます。息子の「家庭の夕べをしよう」の一声で我が家の家庭の夕べが始まることもよくあ

りました。

このような試行錯誤の末にたどり着いた、我が家の200回目の家庭の夕べで、私たちは、2年後の300回記念の家庭の夕べのときに家族で読むための手紙を書きました。息子は今書けるだけの文字と絵を、私たち夫婦は2年後に一人一人がどのようにになっているかを予想し、それを目標として書き、封筒に入れました。私たちはこの200回目の家庭の夕べを、我が家にとって特別な意義を持つ大きな節目とし、今後の家庭の夕べをさらに楽しく、家族の成長を互いに助け合える場にしていくための新たなスタートとしました。

私は、家庭の夕べによって家庭を堅固なものにできることを知っています。現代の複雑な社会環境の中で、家庭の夕べを通して家族で過ごす時間を持つことや、福音の中で子供を育てられることなど、多くの恵みを得られることに感謝しています。(きし・あいこ)

1993年度「クモラの丘霊園」分譲のお知らせ

所在地：埼玉県入間郡毛呂山町長瀬

1313 武蔵野霊園内

(池袋駅から東武東上・越生 おごせ 線で約1時間、武州長瀬駅下車、徒歩7分)

「クモラの丘霊園」分譲の今年度募集の締め切りは、1993年12月31日です。永代使用料は毎年値上がりいたします。分譲希望者は、早目にお申し込みください。

*注 来年度は一区画305,000円となります。支払い方法は従来どおり一括または分割払いで、分割払いの場合は、初回金4,100円、以降毎月5,100円59回払いの無利子分割払いとなります。

1. 墓地永代使用料 支払い方法

1 区画300,000円*

一括または分割払い。分割払いの場合は、初回金5,000円、以降毎月5,000円59回払いの無利子分割払いとなります。年間3,000円(初回金とともに1年分を前納し、以降毎年定められた期日までに支払うものとします)

2. 墓地管理料

以下の書類をクモラの丘霊園事務局に提出してください。

- (1)クモラの丘霊園使用申し込み書
- (2)住民票
- (3)クモラの丘霊園永代使用契約書 2通
- (4)銀行自動振替手続き書類

3. 申し込み方法

1993年12月31日

4. 今年度申し込み期限

申し込み書類受領確認の後、順番に行ないます。

5. 墓所の指定

三和銀行青山支店 普通預金口座 219499

6. 初回金および

管理料の振込先

クモラの丘霊園 代表 岡本 亮

7. お問い合わせ先

〒106 東京都港区南麻布5-10-30

末日聖徒イエス・キリスト教会内

クモラの丘霊園事務局 電話03(3440)2351(代)

8. その他の情報

分譲開始年月日：1982年9月19日

分譲数：1,600墓所中、547墓所が分譲済み。(1993年9月29日現在)

他霊園との比較：永代使用料は他霊園の5分の1から8分の1です。

10月に召された専任宣教師

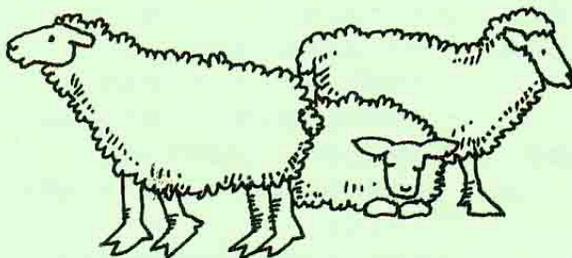
第171期生 8人



後列左から1-4, 前列左から5-8

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 酒本 朗 <small>さけもと あきら</small>	東京南S/大岡山W	岡山伝道部
2. 大沼 浩二 <small>おほぬま こうじ</small>	大阪S/東大阪W	札幌伝道部
3. 村松 由美 <small>むらまつ ゆみ</small>	名古屋西S/大垣B	仙台伝道部
4. 東出 典子 <small>ひがしで みのり</small>	大阪S/関目B	岡山伝道部
5. 酒井 博子 <small>さかき ひろこ</small>	仙台S/泉W	大阪伝道部
6. 三宅 法子 <small>みやけ のりこ</small>	岡山S/福山B	福岡伝道部
7. 後藤田 祥乃 <small>ごとうだましの</small>	福岡M/熊本D/熊本B	岡山伝道部
8. 村上 菜穂子 <small>むらかみ なおこ</small>	札幌S/札幌東W	神戸伝道部

M: 伝道部, S: ステーキ部, D: 地方部, W: ワード部, B: 支部

皆さんの原稿を
募集しています

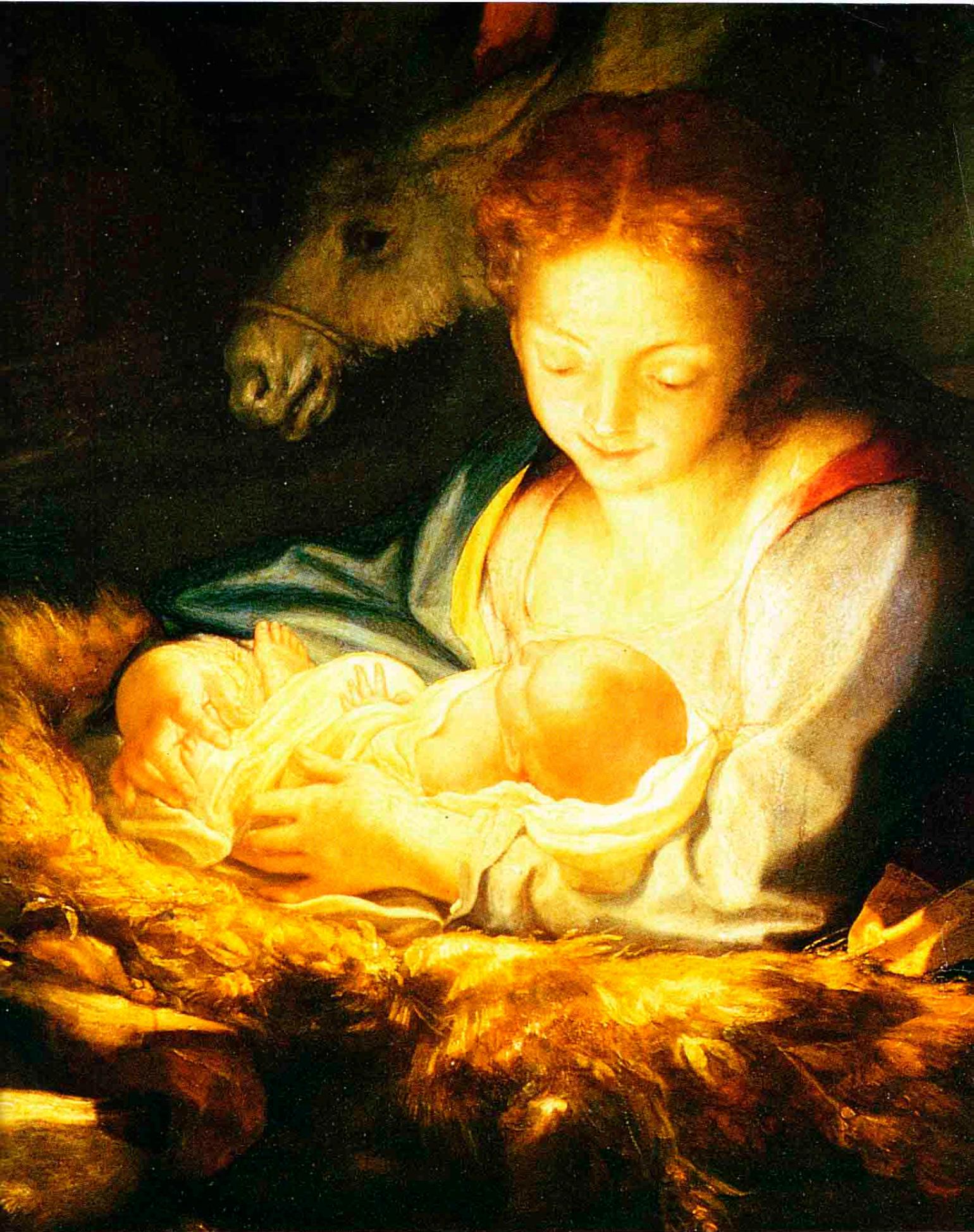
▶ローカルページでは皆さんの原稿を募集しています。以下のような証をお送りください。

- ①どのようないきさつで改宗したか。
- ②日々の生活に福音の原則をどのように応用しているか。またそれによってどのような祝福があったか。
- ③教会員として職場でどのような努力をしているか。また、信仰をどのように生かしているか。
- ④友人や周囲の人にどのように福音を伝えているか。
- ⑤伝道に出るに当たりどのように準備し、障害を克服したか。また、専任宣教師になって得た証。
- ⑥神殿参入や家族の記録を作成するに当たってどのような助けや祝福があったか。
- ⑦家庭の夕べの紹介。
- ⑧その他。(家族の証, ワード部/支部特集など)

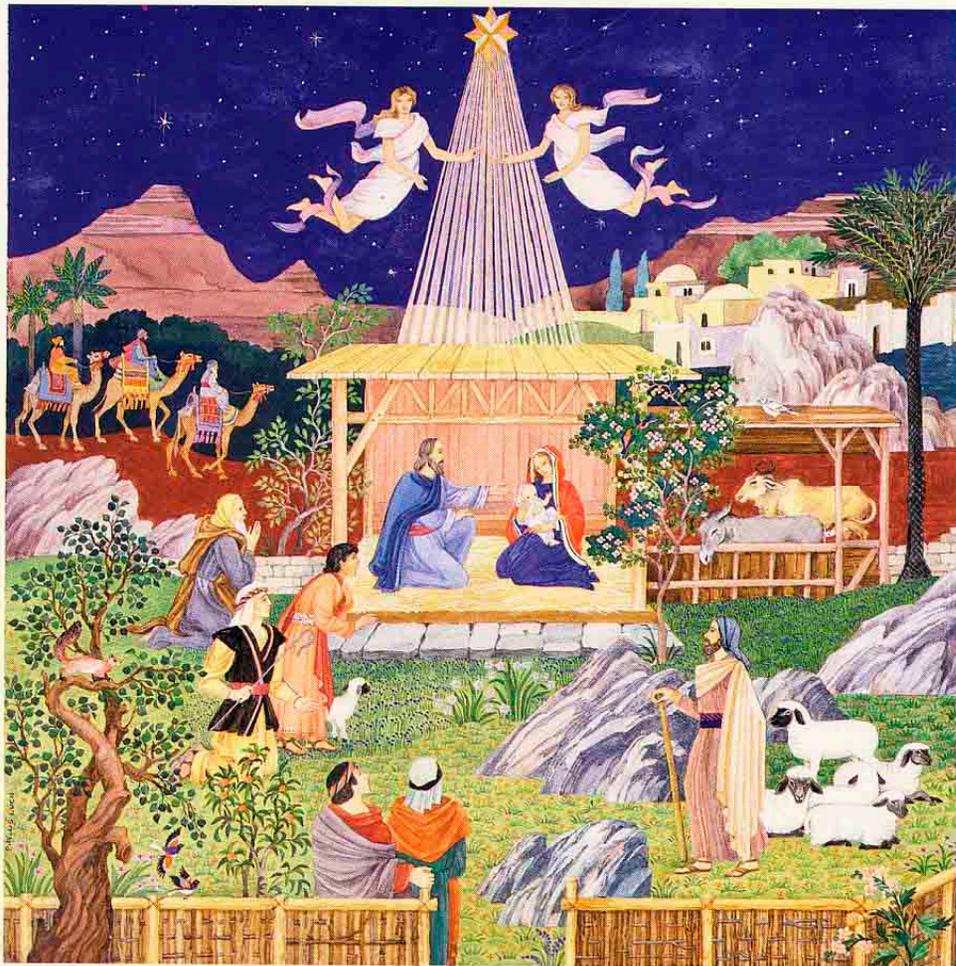
▶現在ローカルページでは証の著者の生年を記載しておりませんが、編集作業の参考のため、投稿の際には連絡先(住所、電話番号)、教会での責任(役職名)、所属ユニット名と併せて生年を記入し、写真を同封のうえお送りください。

▶お送りいただいた原稿は一部手直しさせていただくことがあります。また、掲載されるまでには若干時間がかかる場合もありますので、あらかじめご了承ください。

▶あて先: ☎106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室
電話03(3440)2666(代)
ファクシミリ03(3440)3275



「聖夜」 イタリアの画家、アントニオ・アレーグリ・ダ・コレッジオ(1494—1534年)画
「[マリヤは] 初子を産み、布にくるんで、^{かいほ}飼葉おけの中に寝かせた。」(ルカ2：7)



みつかい
「御使は言った、
『恐れるな。見よ、
すべての民に与えられる大きな喜びを、
あなたがたに伝える。
きょうダビデの町に、
すくいぬし
あなたがたのために救主がお生れになった。
このかたこそ主なるキリストである。』……
そして〔羊飼いたちは〕急いで行って、
マリヤとヨセフ、
かいば
また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。』
(ルカ2：10—11, 16)